

令和 8 年 2 月 10 日
理 科 W G
参 考 資 料 2

理科ワーキンググループ[°]

参考資料・データ

1. 学習指導要領について

学習指導要領について

- 全国的に一定の教育水準を確保するとともに、実質的な教育の機会均等を保障するため、国が学校教育法に基づき定めている大綱的基準。
- 各学校段階ごとに、それぞれの教科等の目標や最低限教えるべき教育内容を定めている。時代の変化や社会や子供の実態等に対応し、これまで概ね 10 年に一度改訂が行われてきた。

※幼稚園については幼稚園教育要領、特別支援学校については、特別支援学校幼稚部教育要領、小学部・中学部学習指導要領及び高等部学習指導要領をそれぞれ定めている。

学習指導要領 前文

…教育課程を通して、これから時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。

学習指導要領とは、こうした理念の実現に向けて必要となる教育課程の基準を大綱的に定めるものである。…

教育課程編成の基本的な考え方

国

- ・学習指導要領など、学校が編成する教育課程の大綱的な基準を制定

教育委員会
(設置者)

- ・教育課程など学校の管理運営の基本的事項について規則を制定

学校
(校長)

- ・教育課程を編成・実施

学習指導要領の法的な位置付け

教育基本法

- ・教育の目的及び目標、義務教育の目的、学校教育の基本的な性格などについて規定

学校教育法

学校教育法
施行規則
(文部科学省令)

- ・義務教育の目標、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の目的及び目標について規定
- ・小学校等の教科構成、授業時数について規定
- ・各学校の教育課程は、教育課程の基準として文部科学大臣が公示する学習指導要領によるこについて規定

学習指導要領
(文部科学省告示)

- ・教育課程の編成、教育課程の実施と学習評価、児童生徒の発達の支援、学校運営上の留意事項、各教科等の目標及び内容などについて規定
- ・学校種(幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校)ごとに作成

学習指導要領の変遷

平成元年
改訂

社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成
(生活科の新設、道徳教育の充実)

平成10～
11年改訂

基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの
[生きる力]の育成(教育内容の厳選、「総合的な学習の時間」の新設)

平成15年
一部改正

学習指導要領のねらいの一層の実現(例:学習指導要領に示していない
内容を指導できることを明確化、個に応じた指導の例示に小学校の
習熟度別指導や小・中学校の補充・発展学習を追加)

平成20～
21年改訂

「生きる力」の育成、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断
力・表現力等の育成のバランス
(授業時数の増、指導内容の充実、小学校外国語活動の導入)

平成27年
一部改正

道徳の「特別の教科」化 「答えが一つではない課題に子どもたちが道
徳的に向き合い、考え、議論する」道徳教育への転換

平成29～
30年改訂

「生きる力」の育成を目指し資質・能力を三つの柱で整理、社会に開か
れた教育課程の実現

学習指導要領の全体構造

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む
「社会に開かれた教育課程」の実現
各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の
新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成
知識の量を削減せず、質の高い理解を図るために
学習過程の質的改善

主体的な学び
対話的な学び
深い学び

主体的・対話的で深い学びの実現

(「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善)について(イメージ)

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにすること

【主体的な学び】の視点

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。



主体的な学び
対話的な学び
深い学び

学びを人生や社会に
生かそうとする
学びに向かう力・
人間性等の涵養

生きて働く
知識・技能の
習得

未知の状況にも
対応できる
思考力・判断力・表現力
等の育成



【対話的な学び】の視点

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。



【深い学び】の視点

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

学習指導要領の構成 ー小学校の例ー

第1章 総則

第3章 特別の教科 道徳

第2章 各教科

第1節 国語

第2節 社会

第3節 算数

第4節 理科

第5節 生活

第6節 音楽

第7節 図画工作

第8節 家庭

第9節 体育

第10節 外国語

第4章 外国語活動

第5章 総合的な学習の時間

第6章 特別活動

高等学校共通教科の履修順や単位数（現行制度）

- 高等学校については、学年の区分を設けないことができる（単位制高校）ほか、修業年限を4年としている高等学校（定時制など）もあることから、各教科・科目において学習する年次を原則として示していないが、教科の学習内容の体系性等を踏まえ、科目の履修順等を示している場合がある。
- 教科の系統性を確保する役割を果たす一方、基礎科目を履修しないと発展科目を履修できないことから、入学年次の教育課程が過密になりがちであることや、カリキュラム・マネジメントの自由度を狭めている、学習内容の習熟の早い子供・遅い子供を広く受け止める教育課程編成がしにくいといった課題もある。

高等学校学習指導要領(平成30年告示)第1章 総則

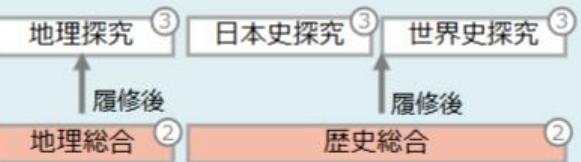
第2款 3(5) 各教科・科目等の内容等の取扱い

イ 第2章以下に示す各教科・科目及び特別活動の内容に掲げる事項の順序は、特に示す場合を除き、指導の順序を示すものではないので、学校においては、その取扱いについて適切な工夫を加えるものとする。

国語科



地理歴史科



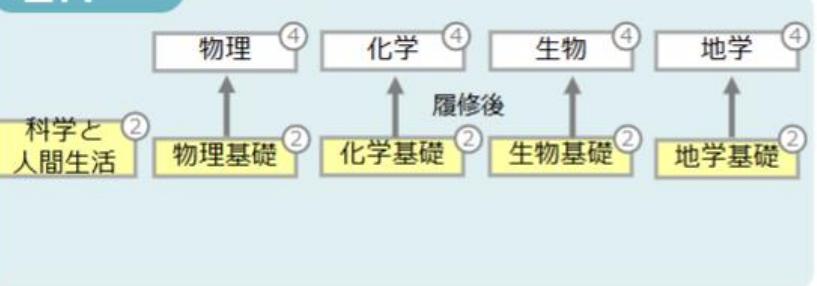
公民科



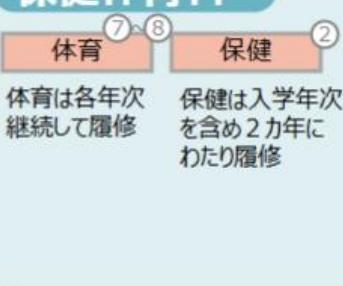
数学科



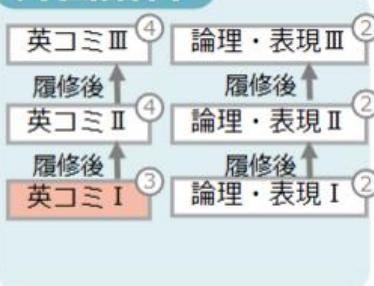
理科



保健体育科



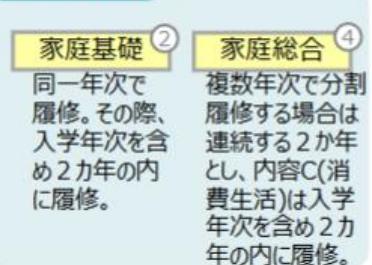
外国語科



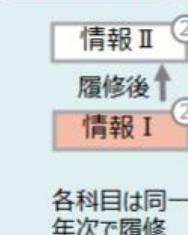
芸術科



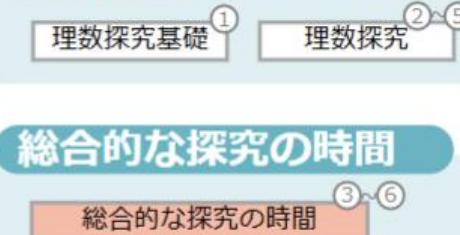
家庭科



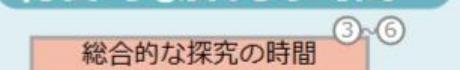
情報科



理数科



総合的な探究の時間



2. 理科の教育課程について

前回改訂時の方針と主な改訂内容（理科）

改訂の方針

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
(平成28年12月中央教育審議会答申) (抜粋)

第2部 各学校段階、各教科等における改訂の具体的な方向性

第2章 各教科・科目等の内容の見直し

4. 理科

- 国際調査において、日本の生徒は理科が「役に立つ」、「楽しい」との回答が国際平均より低く、理科の好きな子供が少ない状況を改善する必要がある。このため、**生徒自身が観察・実験を中心とした探究の過程を通じて課題を解決したり、新たな課題を発見したりする経験を可能な限り増加させていくことが重要**であり、このことが**理科の面白さを感じたり、理科の有用性を認識したりすることにつながっていく**と考えられる。
- また、現代社会が抱える様々な課題を解決するためにイノベーションが期待されており、世界的にも理数教育の充実や創造性の涵養が重要視されており、米国等におけるS T E M教育の推進はその一例である。S T E M教育においては、問題解決型の学習やプロジェクト型の学習が重視されており、我が国における探究的な学習の重視と方向性を同じくするものである。**探究的な学習は教育課程全体を通じて充実を図るべきものであるが、観察・実験等を重視して学習を行う教科である理科がその中核となって探究的な学習の充実を図っていくことが重要**である。

主な改訂内容

- 平成29年3月の**小・中学校学習指導要領改訂**においては理科について、
 - ・育成を目指す資質・能力を育成する観点から、**科学的に探究する学習活動を充実**。
 - ・理科を学ぶことの意義や有用性の実感及び理科への関心を高める観点から、**日常生活や社会との関連を重視**。
 - ・観察、実験の充実を図る観点から、**器具等の物的環境の整備や、人的支援などの計画的な環境整備の重視**。
- 平成30年3月の**高等学校学習指導要領改訂**においては理科について、
 - ・理数を学ぶことの有用性の実感や理数への関心を高める観点から、**日常生活や社会との関連を重視**。
 - ・見通しをもった観察、実験を行うことなどの**科学的に探究する学習活動の充実**により学習の質を向上。
 - ・将来、知の創出をもたらすことができる創造性豊かな人材の育成を目指し、新たな探究的科目として**「理数探究基礎」及び「理数探究」を新設**。

(小学校理科) 前回改訂に当たっての改訂の要点と目標

旧 学習指導要領での目標

自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、
問題解決の能力と
自然を愛する心情を育てるとともに、
自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図り、
科学的な見方や考え方を養う。

【改訂の要点】

- 小学校理科で育成を目指す資質・能力を育む観点
 - 自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、その結果を基に考察し、結論を導きだすなどの問題解決の活動を充実
- 理科を学ぶことの意義や有用性の実感及び理科への関心を高める観点
 - 日常生活や社会との関連を重視する方向で検討

新 学習指導要領での目標

自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を次とおり育成することを目指す。

- (1) 自然の事物・現象についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。
- (2) 観察・実験などを行い、問題解決の力を養う。
- (3) 自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養う。

- 理科で育成を目指す資質・能力を育成する観点から、自然の事物・現象に進んで関わり、見通しをもって観察、実験などを行い、その結果を分析して解釈するなどの科学的に探究する学習を充実。
- 理科を学ぶことの意義や有用性の実感及び理科への関心を高める観点から、日常生活や社会との関連を重視。

現行の中学校・高等学校学習指導要領における「目標」の構成

○中学校学習指導要領

自然の事物・現象に関わり、**理科の見方・考え方を働かせ**、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 自然の事物・現象についての理解を深め、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようする。
【知識及び技能】

- (2) 観察、実験などを行い、科学的に探究する力を養う。 【思考力、判断力、表現力等】

- (3) 自然の事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度を養う。
【学びに向かう力、人間性等】

○高等学校学習指導要領

自然の事物・現象に関わり、**理科の見方・考え方を働かせ**、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 自然の事物・現象についての理解を深め、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する技能を身に付けるようにする。
【知識及び技能】

- (2) 観察、実験などを行い、科学的に探究する力を養う。 【思考力、判断力、表現力等】

- (3) 自然の事物・現象に主体的に関わり、科学的に探究しようとする態度を養う。
【学びに向かう力、人間性等】

理科の教科科目の構成①

実線は新規項目。破線は移行項目。

校種	学年	エネルギー			粒子			
		エネルギーの捉え方	エネルギーの変換と保存	エネルギー資源の有効利用	粒子の存在	粒子の結合	粒子の保存性	粒子のもつエネルギー
小学校	第3学年	風とゴムの力の働き ・風の力の働き ・ゴムの力の働き	光と音の性質 ・光の反射・集光 ・光の当て方と明るさや暖かさ ・異極と同極 ・音の伝わり方と大小	磁石の性質 ・磁石に引き付けられる物 ・電気を通すつなぎ方 ・電気を通す物			物と重さ ・形と重さ ・体積と重さ	
	第4学年		電流の働き ・乾電池の数とつなぎ方		空気と水の性質 ・空気の圧縮 ・水の圧縮		金属、水、空気と温度 ・温度と体積の変化 ・温まり方の違い ・水の三態変化	
	第5学年	振り子の運動 ・振り子の運動	電流がつくる磁力 ・鉄心の磁化・極の変化 ・電磁石の強さ				物の溶け方 (溶けている物の均一性。(中1から移行)を含む) ・重さの保存 ・物が水に溶ける量の限度 ・物が水に溶ける量の変化	
	第6学年	てこの規則性 ・てこのつり合いの規則性 ・てこの利用	電気の利用 ・発電 (光電池。(小4から移行)を含む), 蓄電 ・電気の変換 ・電気の利用		燃焼の仕組み ・燃焼の仕組み	水溶液の性質 ・酸性、アルカリ性、中性 ・気体が溶けている水溶液 ・金属を変化させる水溶液		
	第1学年	力の働き ・力の働き ・力のつり合い (2力のつり合い (中3から移行)を含む)	光と音 ・光の反射・屈折 (光の色を含む) ・凸レンズの働き ・音の性質		物質のすがた ・身の回りの物質とその性質 ・気体の発生と性質	水溶液 ・水溶液	状態変化 ・状態変化と熱 ・物質の融点と沸点	
	第2学年	電流 ・回路と電流・電圧 ・電流・電圧と抵抗 ・電気とそのエネルギー (電気による発熱。(小6から移行)を含む) ・静電と電流 (電子、放射線を含む)			物質の成り立ち ・物質の分解 ・原子・分子	化学変化 ・化学変化 ・化学変化における酸化と還元 ・化学変化と熱		
中学校	第3学年	電流と磁界 ・電流がつくる磁界 ・磁界中の電流が受ける力 ・電磁誘導と発電				化学変化と物質の質量 ・化学変化と質量の保存 ・質量変化の規則性		
	第1学年	力のつり合いと合成・分解 ・水中の物体に働く力 (水圧、浮力 (中1から移行)を含む) ・力の合成・分解			水溶液とイオン ・原子の成り立ちとイオン ・酸、アルカリ ・中和と塩			
	第2学年	運動の規則性 ・運動の速さと向き ・力と運動			化学変化と電池 ・金属イオン ・化学変化と電池			
高等学校	第3学年	力学的エネルギー ・仕事とエネルギー ・力学的エネルギーの保存	エネルギーと物質 ・エネルギーとエネルギー資源 (放射線を含む) ・様々な物質とその利用 (プラスチック。(中1から移行)を含む) ・科学技術の発展		自然環境の保全と科学技術の利用 ・自然環境の保全と科学技術の利用 (第2分野と共に)			
	第1学年	物理基礎				化学基礎		
	第2学年	運動の表し方 ・物理量の測定と扱い方 ・運動の表し方 ・直線運動の加速度	波 ・波の性質 ・音と振動		化学と物質 ・化学の特徴 ・単体と化合物	物質の分離・精製		
	第3学年	様々な力とその働き ・様々な力 ・力のつり合い ・運動の法則 ・物体の落下運動	熱 ・熱と温度		物質の構成粒子 ・原子の構造 ・電子配置と周期表	物質と化学結合 ・イオンとイオン結合 ・分子と共有結合 ・金属と金属結合		
	第4学年	力学的エネルギー ・運動エネルギーと位置エネルギー ・力学的エネルギーの保存	エネルギーとその利用 ・エネルギーとその利用		物質量と化学反応式 ・物質量 ・化学反応式			
	第5学年		物理学が拓く世界 ・物理学が拓く世界			化学反応 ・酸・塩基と中和 ・酸化と還元		

理科の教科科目の構成②

実線は新規項目。破線は移行項目。

校種	学年	生命			地球		
		生物の構造と機能	生命の連続性	生物と環境の関わり	地球の内部と地表面の変動	地球の大気と水の循環	地球と天体の運動
小学校	第3学年	身の回りの生物 <ul style="list-style-type: none"> 身の回りの生物と環境との関わり 昆虫の成長と体のつくり 植物の成長と体のつくり 				太陽と地面の様子 <ul style="list-style-type: none"> 日陰の位置と太陽の位置の変化 地面の暖かさや湿り気の違い 	
	第4学年	人の体のつくりと運動 <ul style="list-style-type: none"> 骨と筋肉 骨と筋肉の働き 	季節と生物 <ul style="list-style-type: none"> 動物の活動と季節 植物の成長と季節 		雨水の行方と地面の様子 <ul style="list-style-type: none"> 地面の傾きによる水の流れ 土の粒の大きさと水のしみ込み方 	天気の様子 <ul style="list-style-type: none"> 天気による1日の気温の変化 水の自然蒸発と結露 	月と星 <ul style="list-style-type: none"> 月の形と位置の変化 星の明るさ、色 星の位置の変化
	第5学年		植物の発芽、成長、結実 <ul style="list-style-type: none"> 種子の中の養分 発芽の条件 成長の条件 植物の受粉、結実 	動物の誕生 <ul style="list-style-type: none"> 卵の中の成長 発芽の条件 成長の条件 母体内の成長 	流れる水の働きと土地の変化 <ul style="list-style-type: none"> 流れる水の働き 川の上流・下流と川原の石 雨の降り方と増水 	天気の変化 <ul style="list-style-type: none"> 雲と天気の変化 天気の変化の予想 	
	第6学年	人の体のつくりと働き <ul style="list-style-type: none"> 呼吸 消化・吸収 血液循環 主な臓器の存在 	植物の養分と水の通り道 <ul style="list-style-type: none"> でんぶんのでき方 水の通り道 	生物と環境 <ul style="list-style-type: none"> 生物と水、空気との関わり 食べ物による生物の関係（水中の小さな生物（小5から移行）を含む） 人と環境 	土地のつくりと変化 <ul style="list-style-type: none"> 土地の構成物と地層の広がり（化石を含む） 地層のでき方 火山の噴火や地震による土地の変化 		月と太陽 <ul style="list-style-type: none"> 月の位置や形と太陽の位置
中学校	第1学年	生物の観察と分類の仕方 <ul style="list-style-type: none"> 生物の観察 生物の特徴と分類の仕方 			身近な地形や地震、岩石の観察 <ul style="list-style-type: none"> 身近な地形や地震、岩石の観察 		
		生物の体の共通点と相違点 <ul style="list-style-type: none"> 植物の体の共通点と相違点 動物の体の共通点と相違点（中2から移行） 			地層の重なりと過去の様子 <ul style="list-style-type: none"> 地層の重なりと過去の様子 		
	第2学年	生物と細胞 <ul style="list-style-type: none"> 生物と細胞 			火山と地震 <ul style="list-style-type: none"> 火山活動と火成岩 地震の伝わり方と地球内部の働き 		
	第3学年	植物の体のつくりと働き <ul style="list-style-type: none"> 葉、茎、根のつくりと働き（中1から移行） 	動物の体のつくりと働き <ul style="list-style-type: none"> 生命を維持する働き 刺激と反応 		自然の恵みと火山災害：地震災害 <ul style="list-style-type: none"> 自然の恵みと火山災害：地震災害（中3から移行） 	気象観測 <ul style="list-style-type: none"> 気象要素（圧力（中1の第1分野から移行）、を含む） 気象観測 	
高等学校					天気の変化 <ul style="list-style-type: none"> 霧や雲の発生 前線の通過と天気の変化 		
					日本の気象 <ul style="list-style-type: none"> 日本の天気の特徴 大気の動きと海洋の影響 		
					自然の恵みと気象災害 <ul style="list-style-type: none"> 自然の恵みと気象災害（中3から移行） 		天体の動きと地球の自転・公転 <ul style="list-style-type: none"> 日周運動と自転 年周運動と公転
		生物基礎				地学基礎	
高等学校		生物の特徴 <ul style="list-style-type: none"> 生物の共通性と多様性 生物とエネルギー 			惑星としての地球 <ul style="list-style-type: none"> 地球の形と大きさ 地球内部の層構造 	地学の変遷 <ul style="list-style-type: none"> 宇宙、太陽系と地球の誕生 古生物の変遷と地球環境 	
		神経系と内分泌系による調節 <ul style="list-style-type: none"> 情報の伝達 体内環境の維持の仕組み 	遺伝子とその働き <ul style="list-style-type: none"> 遺伝情報とDNA 遺伝情報とタンパク質の合成 	植物と遷移 <ul style="list-style-type: none"> 植生と遷移 	活動する地球 <ul style="list-style-type: none"> フレートの運動 火山活動と地震 		大気と海洋 <ul style="list-style-type: none"> 地球の熱収支 大気と海水の運動
		免疫 <ul style="list-style-type: none"> 免疫の働き 		生態系とその保全 <ul style="list-style-type: none"> 生態系と生物の多様性（生物から移行） 生態系のバランスと保全 			地球の環境 <ul style="list-style-type: none"> 地球環境の科学 日本の自然環境

理科の教科科目の構成③

校種	資質・能力	学年	エネルギー	粒子	生命	地球
小学校	思考力・判断力・表現力等	第3学年	(比較しながら調べる活動を通して) 自然の事物・現象について追究する中で、差異点や共通点を基に、問題を見いだし、表現すること。			
		第4学年	(関係付けて調べる活動を通して) 自然の事物・現象について追究する中で、既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想し、表現すること。			
		第5学年	(条件を制御しながら調べる活動を通して) 自然の事物・現象について追究する中で、予想や仮説を基に、解決の方法を発想し、表現すること。			
		第6学年	(多面的に調べる活動を通して) 自然の事物・現象について追究する中で、より妥当な考え方をつくりだし、表現すること。			
	力学び人間性とかう等		主体的に問題解決しようとする態度を養う。			
			生物を愛護する（生命を尊重する）態度を養う。			

※各学年で育成を目指す思考力、判断力、表現力等については、該当学年において育成することを目指す力のうち、主なものを見たるものであり、他の学年で掲げている力の育成についても十分に配慮すること。

校種	資質・能力	学年	エネルギー	粒子	生命	地球
中学校	思考力・判断力・表現力等	第1学年	問題を見いだし見通しをもって観察、実験などを行い、【規則性、関係性、共通点や相違点、分類するための観点や基準】を見いだして表現すること。			
		第2学年	見通しをもって解決する方法を立案して観察、実験などを行い、その結果を分析して解釈し、【規則性や関係性】を見いだして表現すること。			
		第3学年	見通しをもって観察、実験などを行い、その結果（や資料）を分析して解釈し、【特徴、規則性、関係性】を見いだして表現すること。また、探究の過程を振り返ること。			
	力学び人間性とかう等		見通しをもって観察、実験などを行い、その結果を分析して解釈するとともに、自然環境の保全と科学技術の利用の在り方について、科学的に考察して判断すること。	観察、実験などを行い、自然環境の保全と科学技術の利用の在り方について、科学的に考察して判断すること。		
高等学校	表現力等		【第1分野】物質やエネルギーに関する事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度を養う。		【第2分野】生命や地球に関する事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度、生命を尊重し、自然環境の保全に寄与する態度を養う。	
			※内容の（1）から（7）までについては、それぞれのアに示す知識及び技能とイに示す思考力、判断力、表現力等とを相互に関連させながら、3年間を通じて科学的に探究するために必要な資質・能力の育成を目指すものとする。			

校種	資質・能力	物理基礎	化学基礎	生物基礎	地学基礎
高等学校	表現力等	観察、実験などを通して探究し、【規則性、関係性、特徴など】を見いだして表現すること。			
		【第1分野】物質やエネルギーに関する事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度		【第2分野】生命や地球に関する事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度、生命を尊重し、自然環境の保全に寄与する態度	

※中学校理科との関連を考慮し、それぞれのアに示す知識及び技能とイに示す思考力、判断力、表現力等とを相互に関連させながら、この科目を通じて、科学的に探究するために必要な資質・能力の育成を目指すものとする。

高等学校理科の科目構成の変遷①

昭和31年



※4科目のうち、2科目はすべての生徒に履修させる。

昭和35年



※理科のうち 2 科目。

ただし普通科は、物理（A 又は B を選択）、化学（A 又は B を選択）、生物及び地学は必履修。

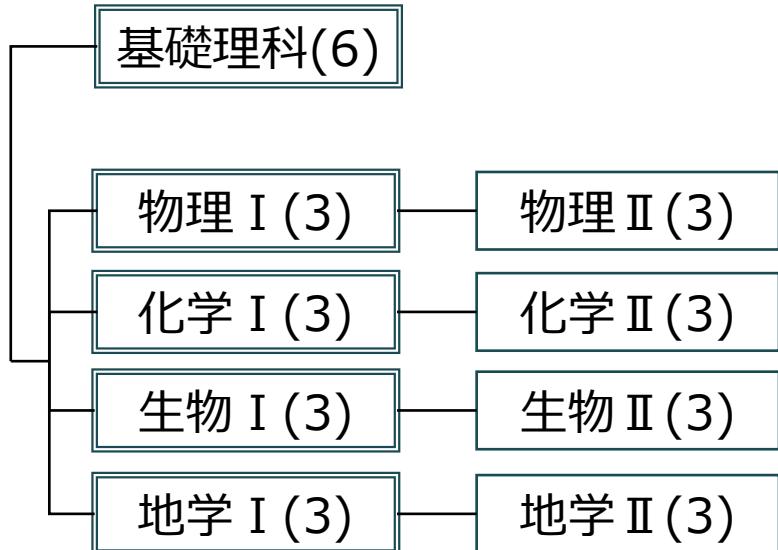
必履修科目

選択必履修科目

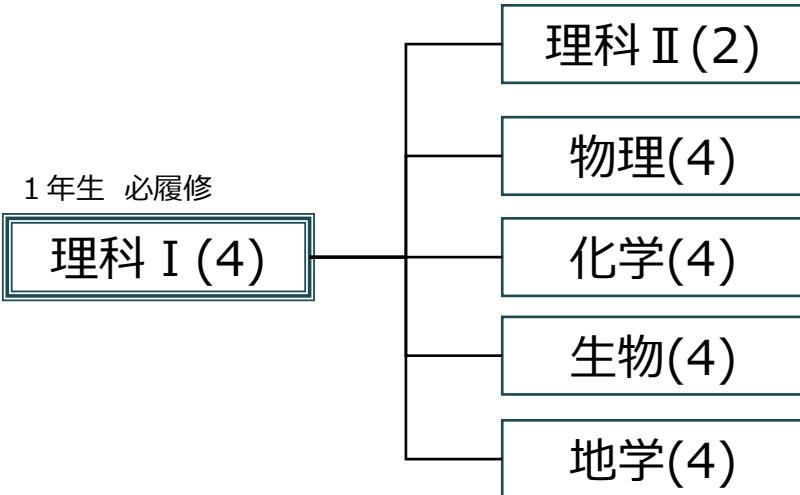
選択科目

高等学校理科の科目構成の変遷②

昭和45年



昭和53年



※ 「基礎理科」 1科目 又は
「物理 I」，「化学 I」，「生物 I」及び「地学 I」のうち 2 科目

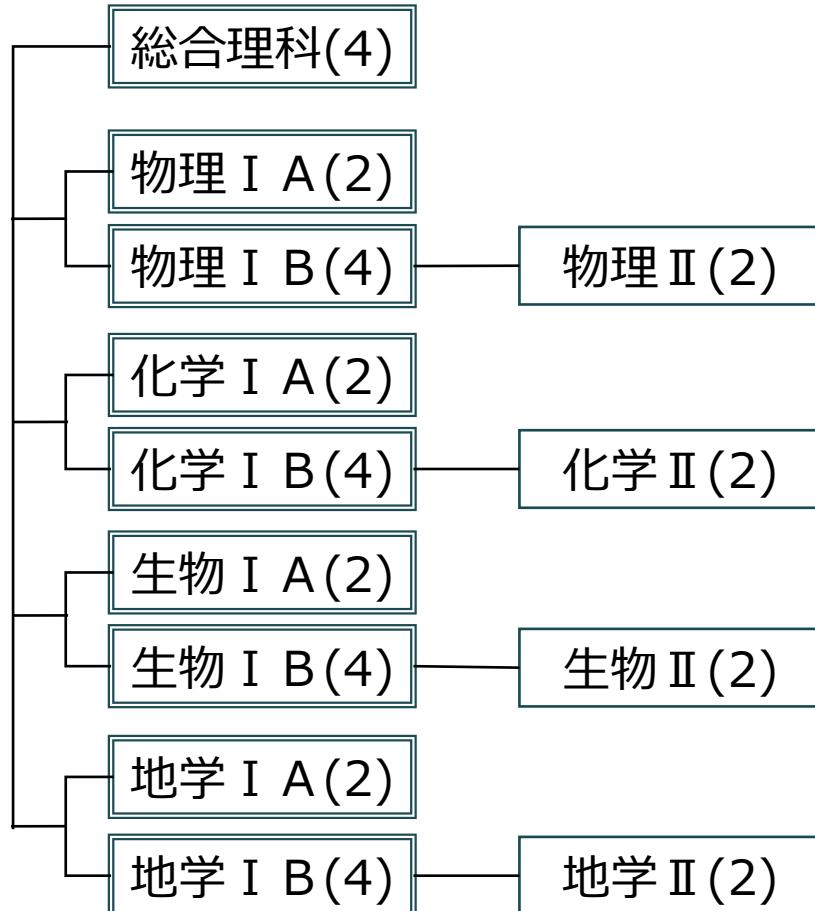
必履修科目

選択必履修科目

選択科目

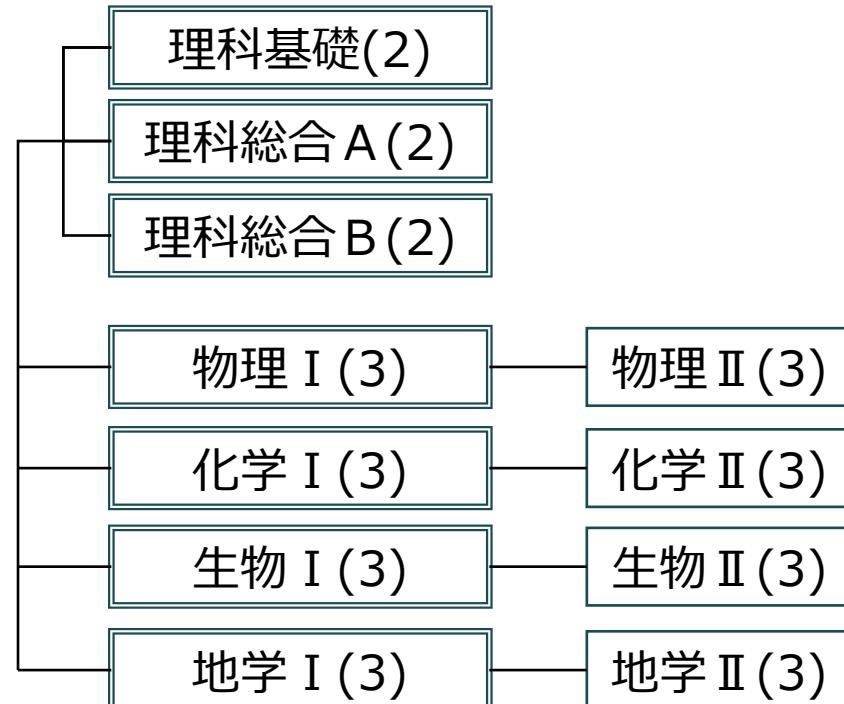
高等学校理科の科目構成の変遷③

平成元年



※「総合理科」、
「物理 I A」又は「物理 I B」、
「化学 I A」又は「化学 I B」、
「生物 I A」又は「生物 I B」及び
「地学 I A」又は「地学 I B」
の5区分から2区分にわたって2科目

平成10年



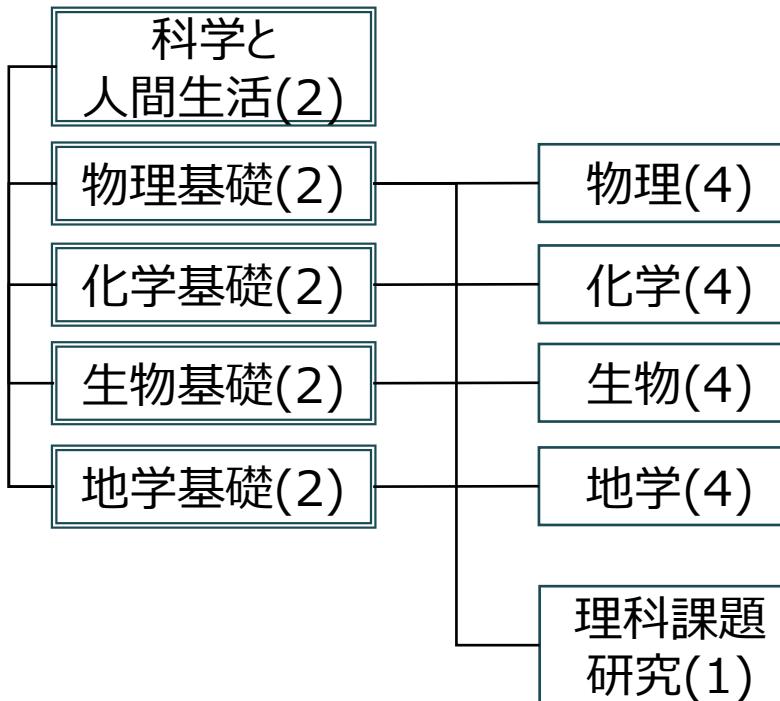
※「理科基礎」、「理科総合A」、「理科総合B」、「物理I」、「化学I」、「生物I」及び「地学I」のうちから2科目
(「理科基礎」、「理科総合A」及び「理科総合B」のうちから1科目以上を含むものとする。)

選択必履修科目

選択科目

高等学校理科の科目構成の変遷④

平成20年



※「科学と人間生活」，「物理基礎」，「化学基礎」，
「生物基礎」及び「地学基礎」のうちから2科目
(うち1科目は「科学と人間生活」とする。) 又は
「物理基礎」，「化学基礎」，「生物基礎」及び
「地学基礎」のうちから3科目

平成30年【現行】



※「科学と人間生活」，「物理基礎」，「化学基礎」，
「生物基礎」及び「地学基礎」のうちから2科目
(うち1科目は「科学と人間生活」とする。) 又は
「物理基礎」，「化学基礎」，「生物基礎」及び
「地学基礎」のうちから3科目

選択必履修科目

選択科目

高等学校・理科の科目構成について【現行】

<選択必履修科目>

科学と人間生活(2単位)

中学校までの学習を基礎とし、分野横断的かつ物理・化学・生物・地学の各分野について、自然や科学技術の発展と日常生活や社会との関係に着目することで、科学に対する興味・関心を高め、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成

物理基礎(2単位)

化学基礎(2単位)

生物基礎(2単位)

地学基礎(2単位)

中学校までの学習を基礎とし、日常生活や社会との関連を図りながら、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成

<選択科目>

物理(4単位)

化学(4単位)

生物(4単位)

地学(4単位)

「○○基礎」と関連を図り、当該分野の事物・現象を更に深く取り扱い、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成

※選択必履修科目間には、履修の順序はない

※「物理」「化学」「生物」「地学」の各選択科目については、それぞれに対応する基礎を付した科目を履修した後に履修

各科目の主な学習内容【現行】

《物理基礎》	《化学基礎》	《生物基礎》	《地学基礎》
<ul style="list-style-type: none"> ・物体の運動とエネルギー ・様々な物理現象とエネルギーの利用 	<ul style="list-style-type: none"> ・化学と人間生活 ・物質の構成 ・物質の変化とその利用 	<ul style="list-style-type: none"> ・生物の特徴 ・ヒトの体の調節 ・生物の多様性と生態系 	<ul style="list-style-type: none"> ・地球のすがた ・変動する地球
《物理》	《化学》	《生物》	《地学》
<ul style="list-style-type: none"> ・様々な運動 ・波 ・電気と磁気 ・原子 	<ul style="list-style-type: none"> ・物質の状態と平衡 ・物質の変化と平衡 ・無機物質の性質 ・有機化合物の性質 ・化学が果たす役割 	<ul style="list-style-type: none"> ・生物の進化 ・生命現象と物質 ・遺伝情報の発現と発生 ・生物の環境応答 ・生態と環境 	<ul style="list-style-type: none"> ・地球の概観 ・地球の活動と歴史 ・地球の大気と海洋 ・宇宙の構造

《科学と人間生活》

(1) 科学技術の発展 分野横断

(2) 人間生活の中の科学

(ア) 光や熱の科学 物理分野

Ⓐ 光の性質とその利用 Ⓛ 热の性質とその利用

(イ) 物質の科学 化学分野

Ⓐ 材料とその再利用 Ⓛ 衣料と食品

(ウ) 生命の科学 生物分野

Ⓐ ヒトの生命現象 Ⓛ 微生物とその利用

(エ) 宇宙や地球の科学 地学分野

Ⓐ 太陽と地球 Ⓛ 自然景観と自然災害

(3) これからの科学と人間生活 分野横断

(ア)～(エ)はそれぞれ
Ⓐ又はⓑのいずれか 1つを履修

【現行】高等学校・理科の必履修科目の組合せについて

現行①

科学と人間生活(2)

+

○○基礎(2)

計4単位

(○○：物理、化学、生物、地学)

現行②

物理基礎(2)

化学基礎(2)

生物基礎(2)

地学基礎(2)

のうち3科目 計6単位

い
ず
れ
か

高校における理科の一般的な履修パターン

	コース	履修科目	総単位数
①	理系・国公立大学志望者コース	{物理基礎, 化学基礎, 生物基礎, 地学基礎} のうち 3 科目 + {物理, 化学, 生物, 地学} のうち 2 科目	14
②	理系・私立大学志望者コース	物理基礎 + 化学基礎 + 生物基礎 + {物理, 化学, 生物} のうち 2 科目	14
③		物理基礎 + 化学基礎 + 生物基礎 + {物理, 化学, 生物} のうち 1 科目	10
④	文系・大学志望者コース	物理基礎 + 化学基礎 + 生物基礎 + {物理, 化学, 生物} のうち 1 科目	10
⑤		{物理基礎, 化学基礎, 生物基礎, 地学基礎} のうち 3 科目	6
⑥	職業系専門学科	科学と人間生活 + {物理基礎, 化学基礎, 生物基礎, 地学基礎} のうち 1 科目	4
⑦	大学進学を希望しない	{物理基礎, 化学基礎, 生物基礎, 地学基礎} のうち 3 科目	6
⑧		科学と人間生活 + {物理基礎, 化学基礎, 生物基礎, 地学基礎} のうち 1 科目	4

【必履修パターン】

・物理基礎[2 単位]、化学基礎[2 単位]、生物基礎[2 単位]、地学基礎[2 単位]から 3 科目を選択
又は

・科学と人間生活[2 単位] + 物理基礎[2 单位]、化学基礎[2 単位]、生物基礎[2 単位]、地学基礎[2 単位]から 1 科目を選択

※物理[4 単位]、化学[4 単位]、生物[4 単位]、地学[4 単位]は選択科目

【出典】文部科学省作成

高等学校理科の履修状況（推計）

【平成20年改訂】

科目	履修率
科学と人間生活	35%
物理基礎	59%
物理	21%
化学基礎	81%
化学	27%
生物基礎	86%
生物	19%
地学基礎	26%
地学	1%



【現行】

科目	履修率
科学と人間生活	33%
物理基礎	49%
物理	19%
化学基礎	71%
化学	27%
生物基礎	77%
生物	15%
地学基礎	23%
地学	1%

教科書の需要数を元に、文部科学省で推計（理科については必履修科目が無いため、数学の必履修科目「数学I」の需要数を100%として、理科の各科目の履修率を推計）

H20年改訂：R1~3年度の平均値、現行：R6,7年度の平均値

2026年度大学入学共通テスト 出題教科・配点・試験時間一覧

出題教科	出題科目	配点	試験時間	選択方法
国語	『国語』	200点	90分	
地理歴史	『地理総合、地理探究』 『歴史総合、日本史探究』 『歴史総合、世界史探究』	1科目 100点	1科目選択 60分	
公民	『公共、倫理』 『公共、政治・経済』 『地理総合／歴史総合／公共』	2科目 200点	2科目選択 130分 (うち解答時間120分)	・6科目から最大2科目を選択解答 ・『地理総合／歴史総合／公共』は3分野から2分野を選択解答
数学	① 『数学Ⅰ、数学A』 『数学Ⅰ』 ② 『数学Ⅱ、数学B、数学C』	100点 100点	70分 70分	・2科目から1科目を選択解答
理科	『物理基礎／化学基礎／生物基礎／地学基礎』 『物理』 『化学』 『生物』 『地学』	1科目 100点 2科目 200点	1科目選択 60分 2科目選択 130分 (うち解答時間120分)	・5科目から最大2科目を選択解答 ・『物理基礎／化学基礎／生物基礎／地学基礎』は4分野から2分野を選択解答
外国語	『英語（リーディング、リスニング）』 『ドイツ語』 『フランス語』 『中国語』 『韓国語』	各100点 計200点 200点	英語： リーディング80分 リスニング60分 (うち解答時間30分) その他：80分	・5科目から1科目を選択解答
情報	『情報Ⅰ』	100点	60分	

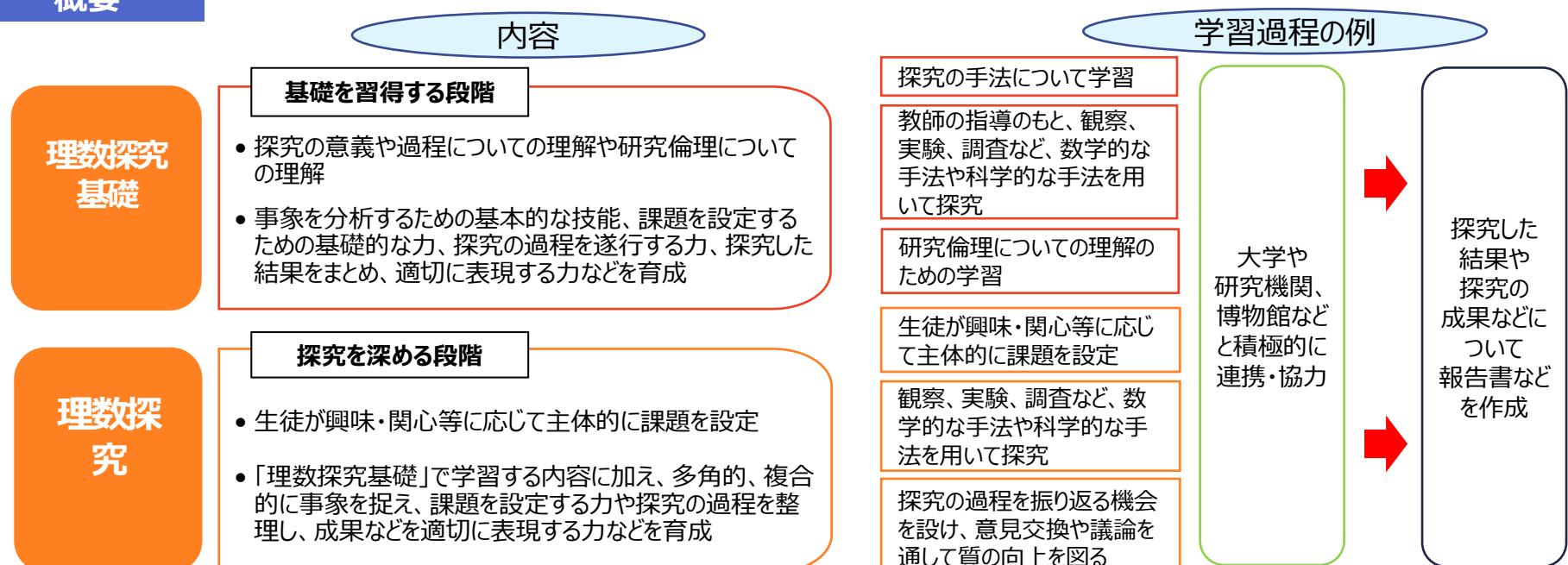
- ・『』は大学入学共通テストにおける出題科目を表す
- ・『地理総合／歴史総合／公共』や『物理基礎／化学基礎／生物基礎／地学基礎』にある“／”は、一つの出題科目の中で複数の出題範囲を選択解答することを表す
- ・『国語』は「現代の国語」及び「言語文化」の内容を出題範囲とし、近代以降の文章（110点）及び古典（古文45点、漢文45点）を出題

高等学校の数学・理科にわたる探究的科目 –「理数探究基礎」、「理数探究」–

背景等

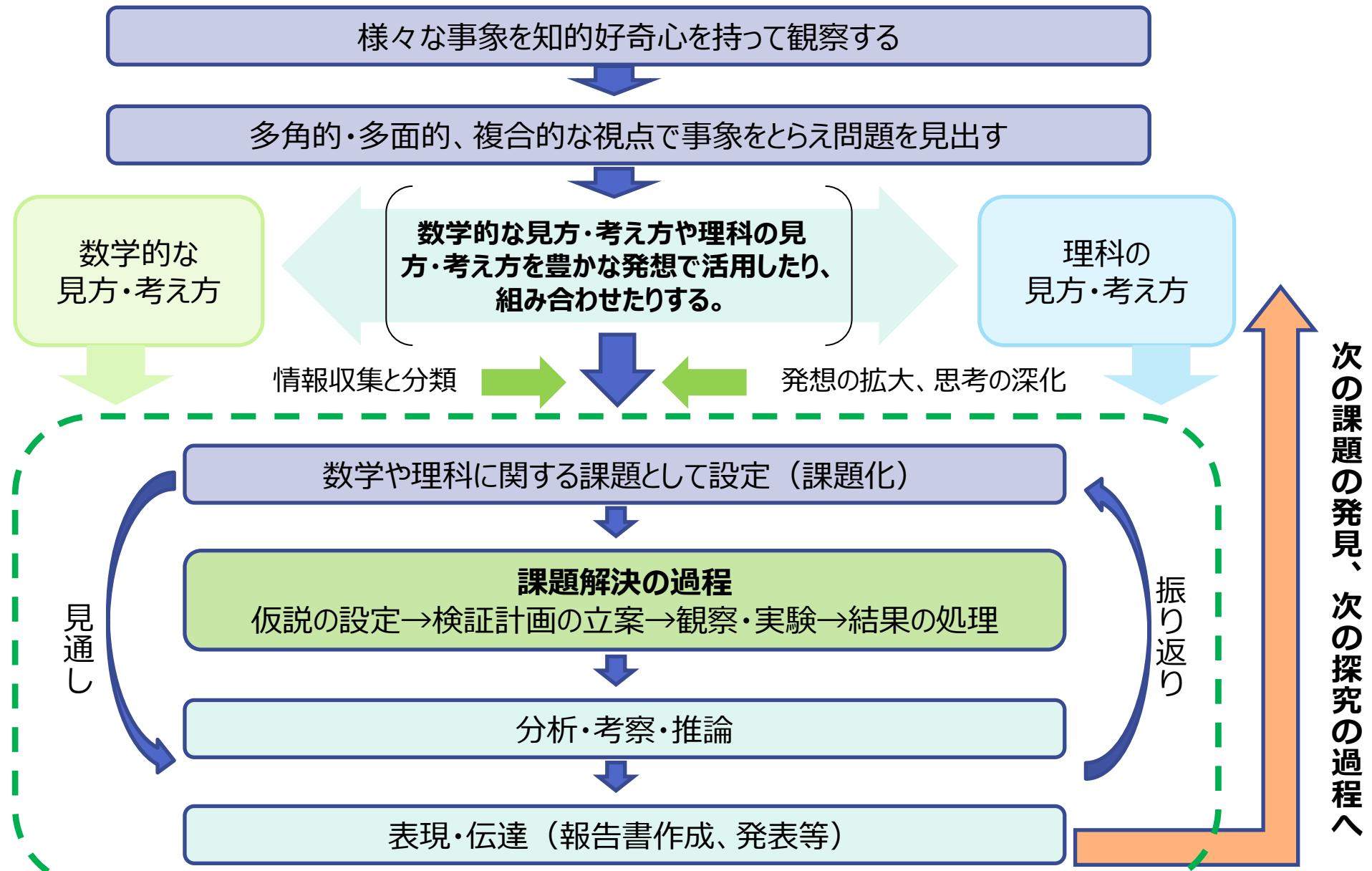
- 中央教育審議会答申において、将来、学術研究を通じた知の創出をもたらすことができる創造性豊かな人材の育成を目指し、そのための基礎的な資質・能力を身に付けることができる数学・理科にわたる新たな探究的科目の設定が提言されたことを受けて新設。
- 数学的な見方・考え方や理科の見方・考え方を組み合わせるなどして動かせ、探究の過程を通して、課題を解決するために必要な資質・能力を育成。
- 様々な事象や課題に知的好奇心や主体性をもって向き合い、教科・科目の枠にとらわれない多角的、複合的な視点で事象を捉える力などを養う。
- 粘り強く考え行動し、課題の解決や新たな価値の創造に向けて積極的に挑戦しようとする態度などを養う。

概要



- 「理数探究基礎」又は「理数探究」の履修をもって総合的な探究の時間の一部又は全部に替えることが可能。
- 「理数探究基礎」及び「理数探究」は選択履修科目であるが、理数に関する学科においては、原則として「理数探究」を全ての生徒が必履修。

共通教科「理数科」の学習過程（探究の過程）のイメージ



共通教科「理数科」と「総合的な探究の時間」との比較（解説p39）

理数科	総合的な探究の時間
<p>① 課題の設定</p> <p>自然や社会の様々な事象に関わり、そこから数学や理科などに関する課題を設定する。</p>	<p>① 課題の設定</p> <p>体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ。</p>
<p>② 課題解決の過程</p> <p>数学的な手法や科学的な手法などを用いて、仮説の設定、検証計画の立案、観察、実験、調査等、結果の処理などを行う。</p>	<p>② 情報の収集</p> <p>必要な情報を取り出したり収集したりする。</p>
<p>③ 分析・考察・推論</p> <p>得られた結果を分析し、先行研究や理論なども考慮しながら考察し推論する。</p>	<p>③ 整理・分析</p> <p>収集した情報を、整理したり分析したりして思考する。</p>
<p>④ 表現・伝達</p> <p>課題解決の過程と結果や成果などをまとめ、発表する。</p>	<p>④ まとめ・表現</p> <p>気付きや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する。</p>

ア 自然事象や社会的事象に関すること

(参考例)

- ・振り子の運動に関する探究
- ・成分物質の抽出・単離の手法を活用した探究
- ・光合成速度に関する探究
- ・コンピュータウイルスの拡散過程に関する探究

エ 科学技術に関すること

(参考例)

- ・空気による揚力や抵抗力に関する探究
- ・高分子化合物、染料、指示薬、洗剤などの合成に関する探究
- ・新たなDNA抽出方法に関する探究

イ 先端科学や学際的領域に関すること

(参考例)

- ・楽器の音の鳴り方に関する探究
- ・銅樹のフラクタル成長の規則性に関する探究
- ・DNAによる品種判定に関する探究

オ 数学的事象に関すること

(参考例)

- ・べき a^b に関する探究
- ・金平糖の角の形成過程の数理モデルに関する探究

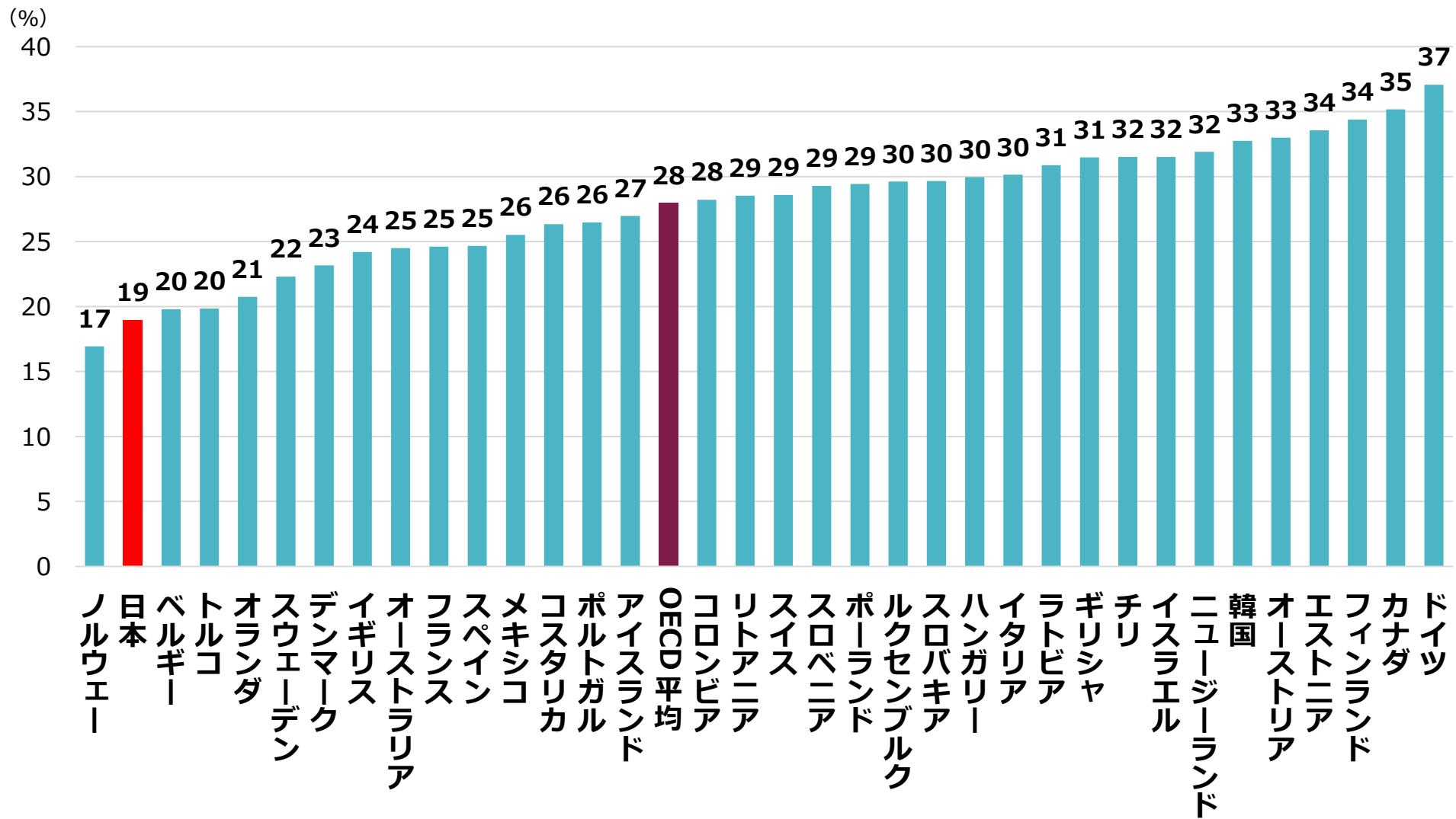
ウ 自然環境に関すること

(参考例)

- ・身近な環境を活用した発電に関する探究
- ・地域の自然環境と人間生活の影響についての探究
- ・水質浄化に関する探究
- ・地域気象に関する探究

3. 社会や高等教育との接続、進路選択

日本は理工系学部入学者が19%（OECD諸国ワースト2位）

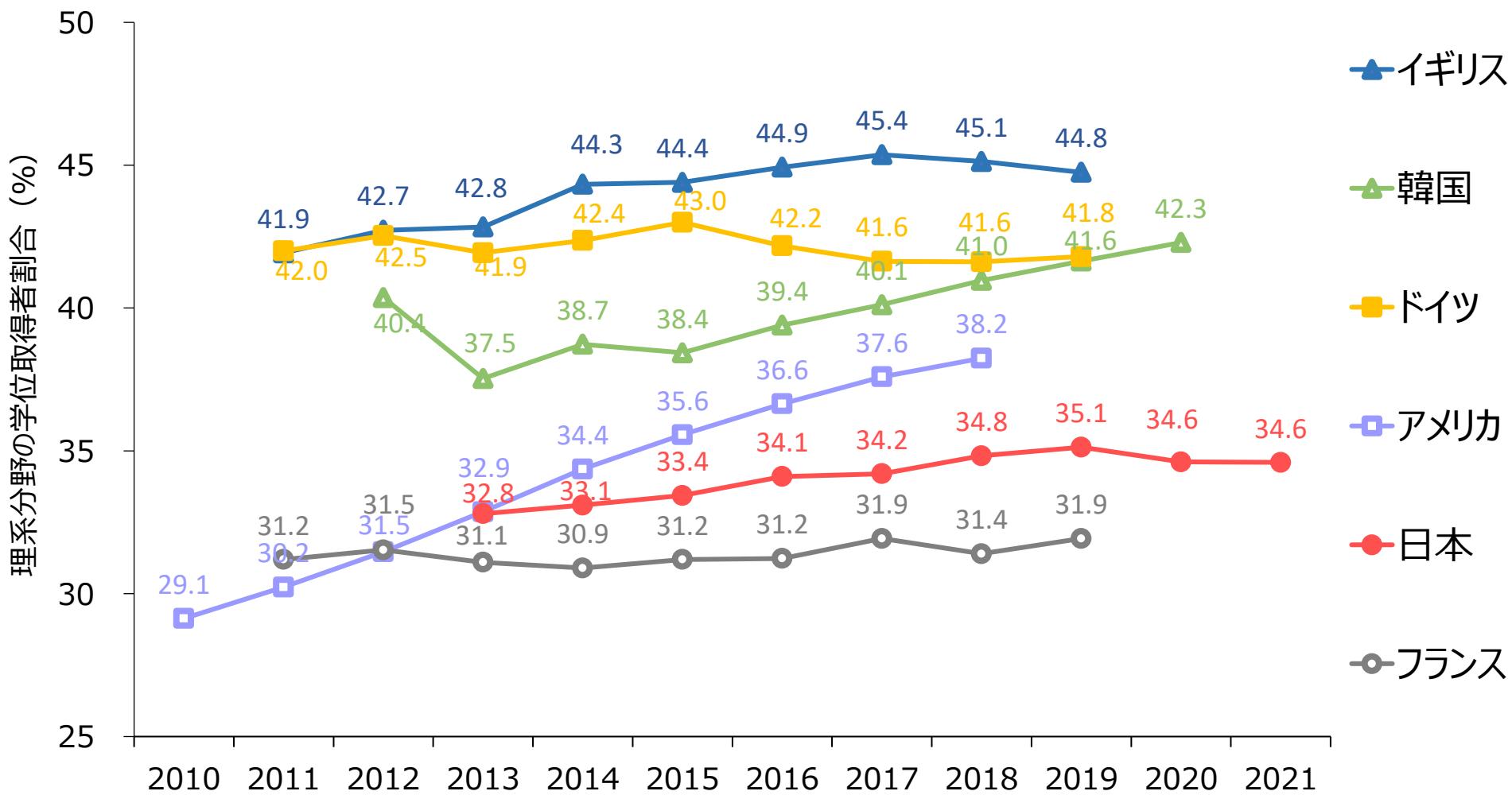


(備考) “Natural sciences, mathematics and statistics”, “Information and Communication Technologies, “Engineering, manufacturing and construction”を「理工系」に分類される学部系統としてカウント。データは2023年時点。

(出所) OECD.stat「New entrants by field」より作成。

成長分野を支える理系人材の輩出状況

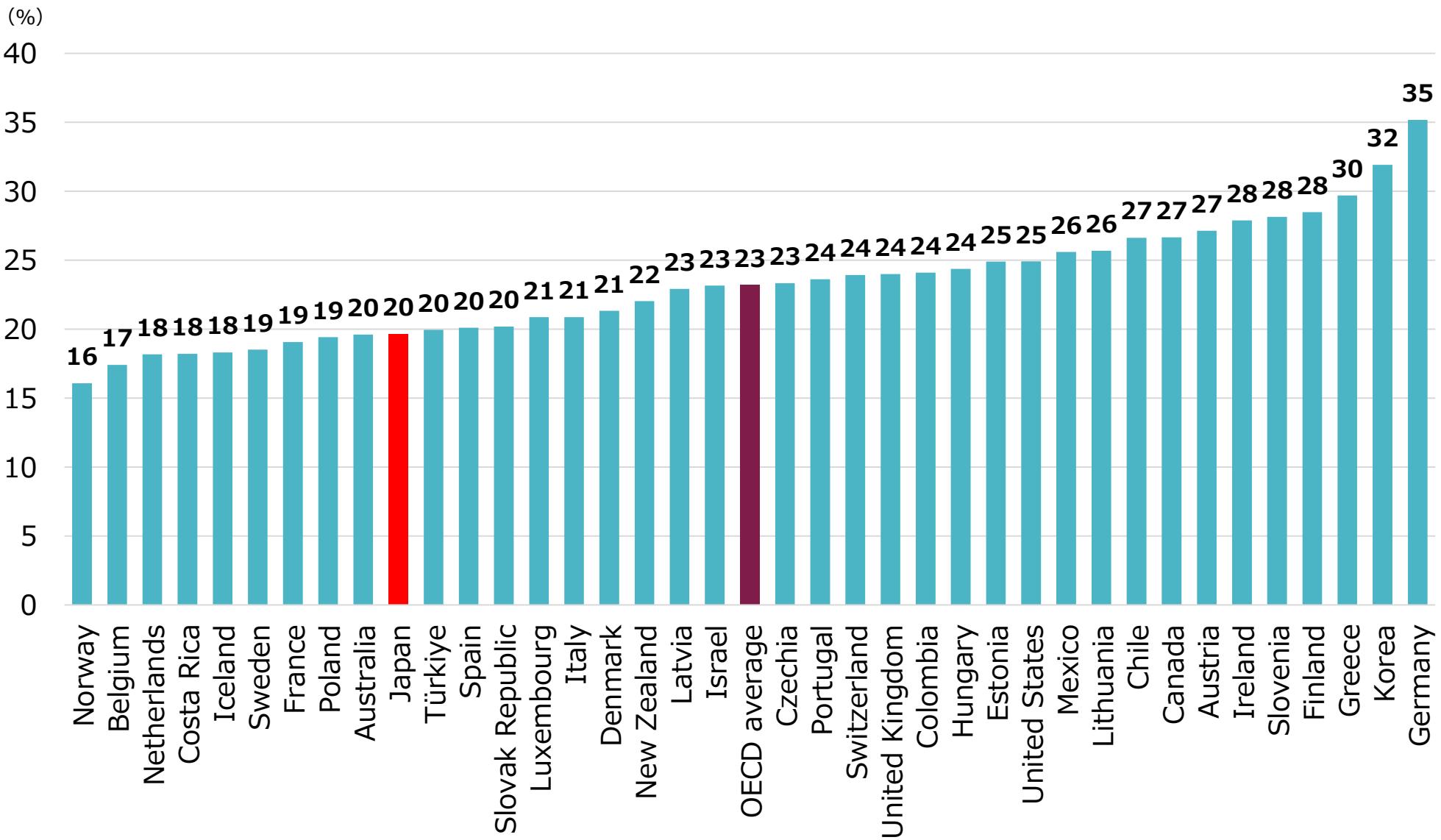
各国の自然科学（理系）学部の学位（学部段階）取得者割合（※）の推移



※「理・工・農・医・歯・薬・保健」及びこれらの学際的なものについて「その他」区分のうち推計

【出典】文部科学省「諸外国の教育統計」より作成

学部卒業者中のSTEM分野の比率（OECD諸国ワースト10位）

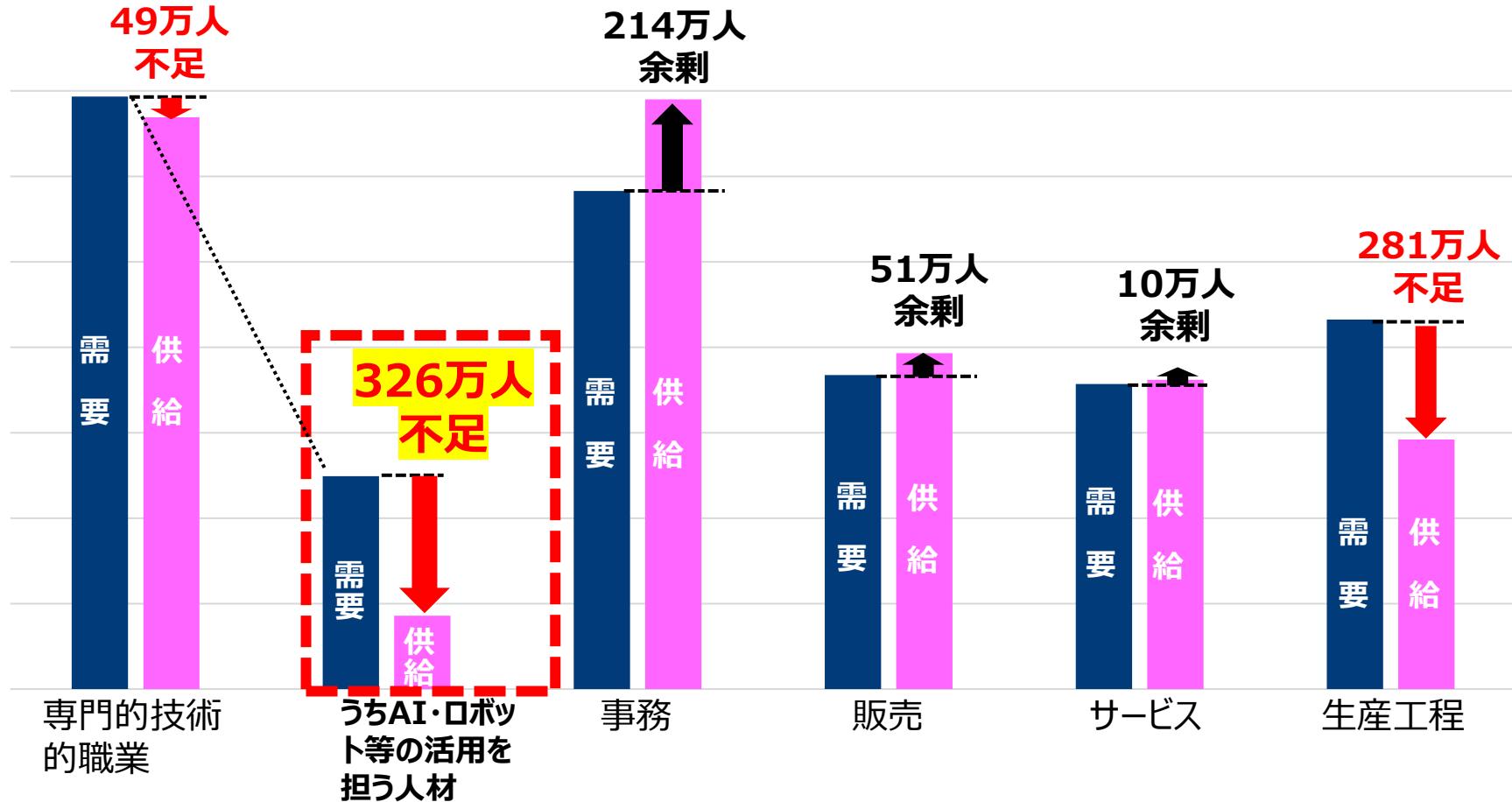


(出典) OECD, Education at a Glance 2025 OECD INDICATORS, Table B4.2 Distribution of tertiary graduates, by level of education and selected field of study (2023) を元に、文部科学省で作成。

STEM分野 : Science, technology, engineering and mathematics

2040年の人材需給予測

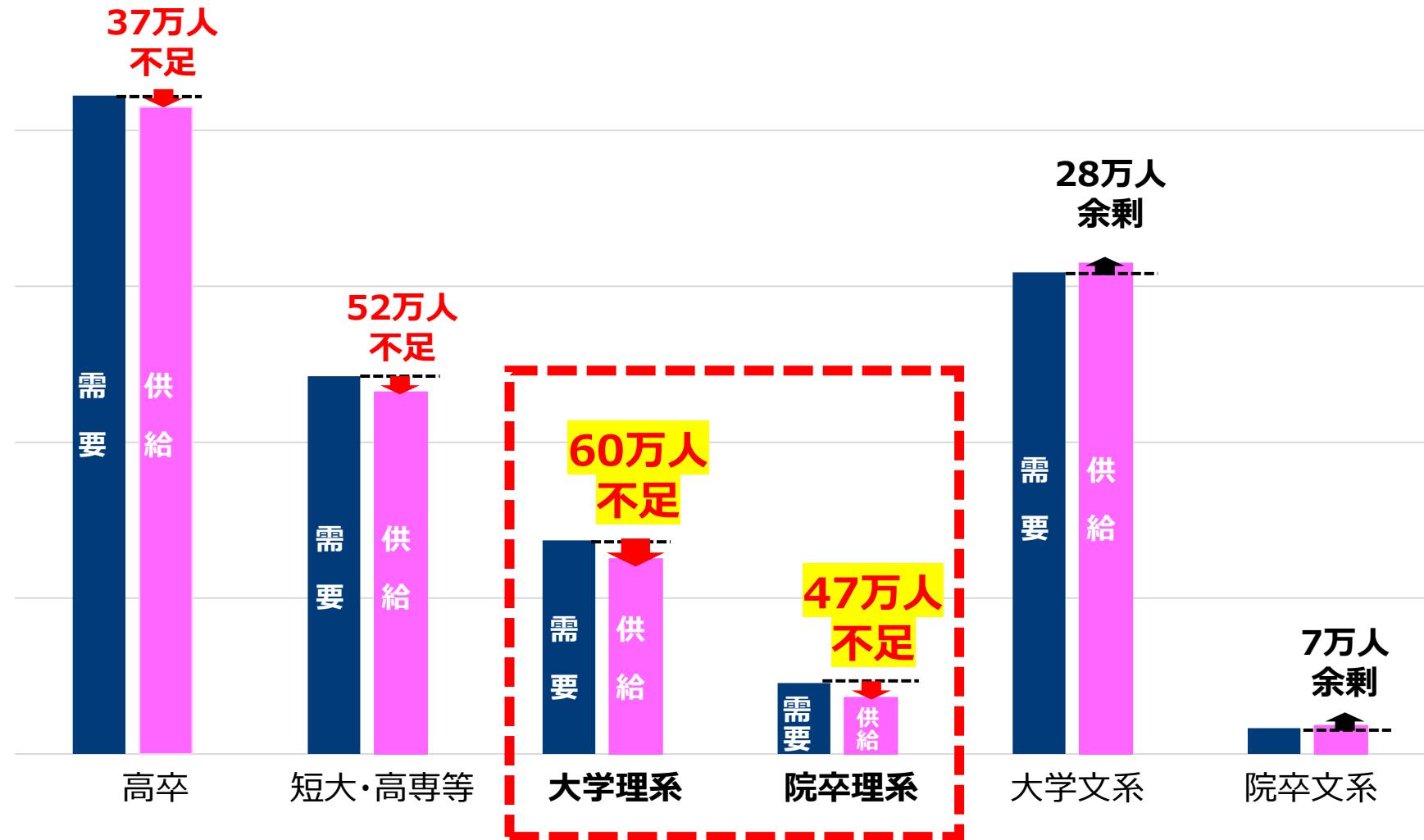
- AI・ロボット等の活用を担う人材が**約326万人不足**
- 事務、販売、サービス等の従事者は**約300万人余剰するリスク**



※ 「2040年の産業構造・就業構造推計について」（2025年5月 経済財政諮問会議武藤経済産業大臣提出資料）を元に文部科学省で作成（労働需要：新機軸ケース、労働供給：現在のトレンドの延長）

2040年の人材需給予測（学歴別）

- 理系大学生・院生が約**107万人不足**
- 文系大学生・院生は約**35万人 余剰**

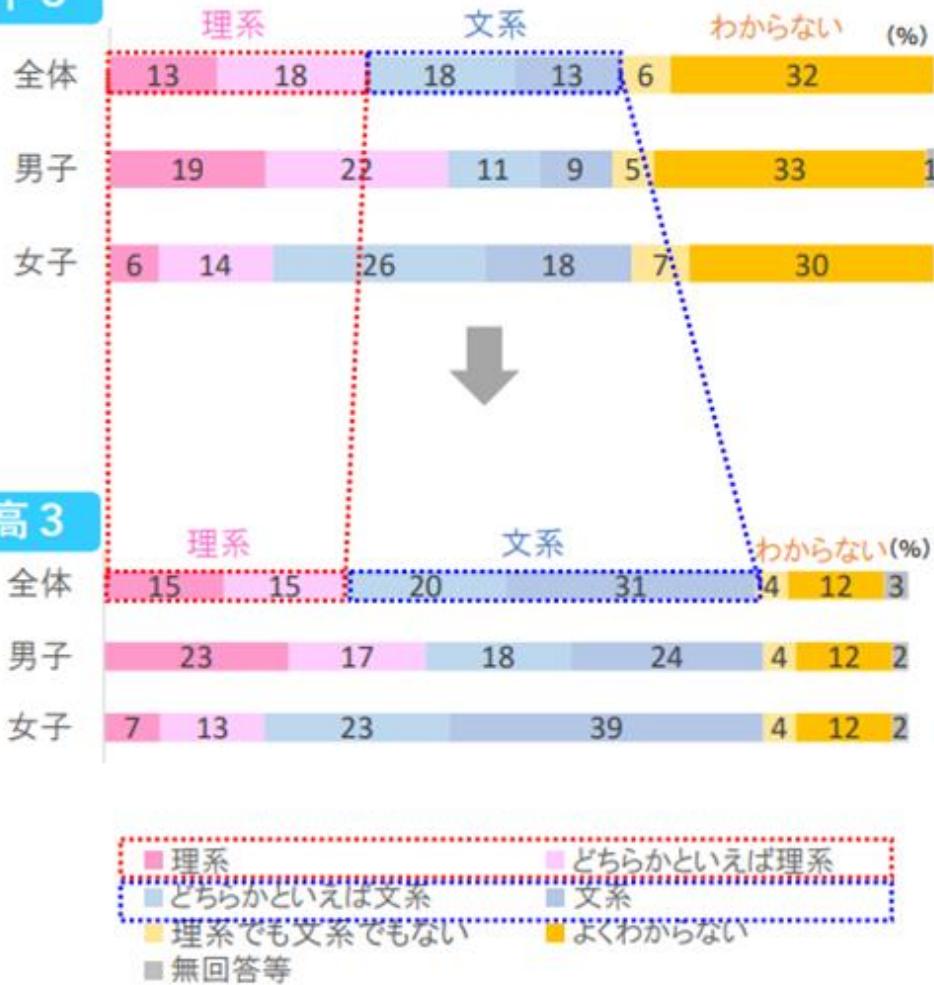


※ 「2040年の産業構造・就業構造推計について」（2025年5月 経済財政諮問会議武藤経済産業大臣提出資料）を元に文部科学省で作成（労働需要：新機軸ケース、労働供給：現在のトレンドの延長）

高校進学段階では理系志向は増えず。 中3で「分からぬ」層が、高校コース分けで文系に

理系文系の「志向」の変化(中3・高3)

中3



高校の学習コース(高3)

高3

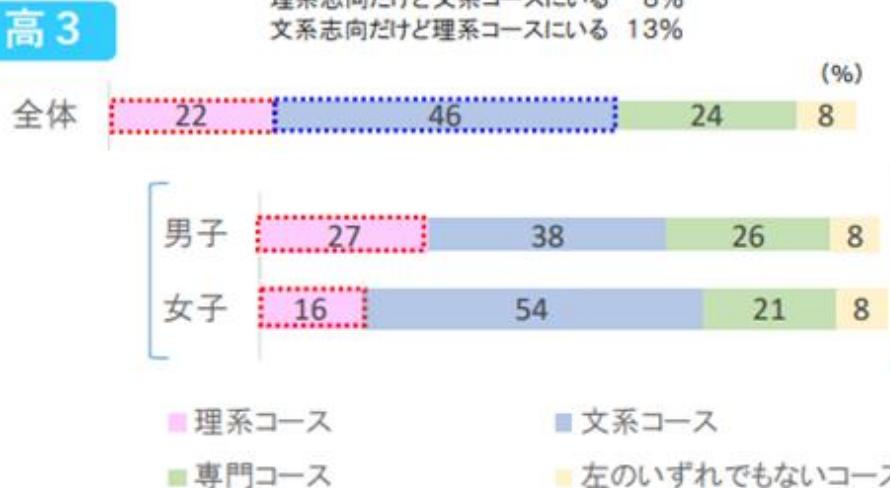
3校のうち2校が文理のコース分け

- 高校の3校のうち2校(66%)では、文系・理系のコース分けを実施
- 大学進学を希望する生徒の割合が高い高校ほど、実施率は高くなる

高1秋頃にコース選択

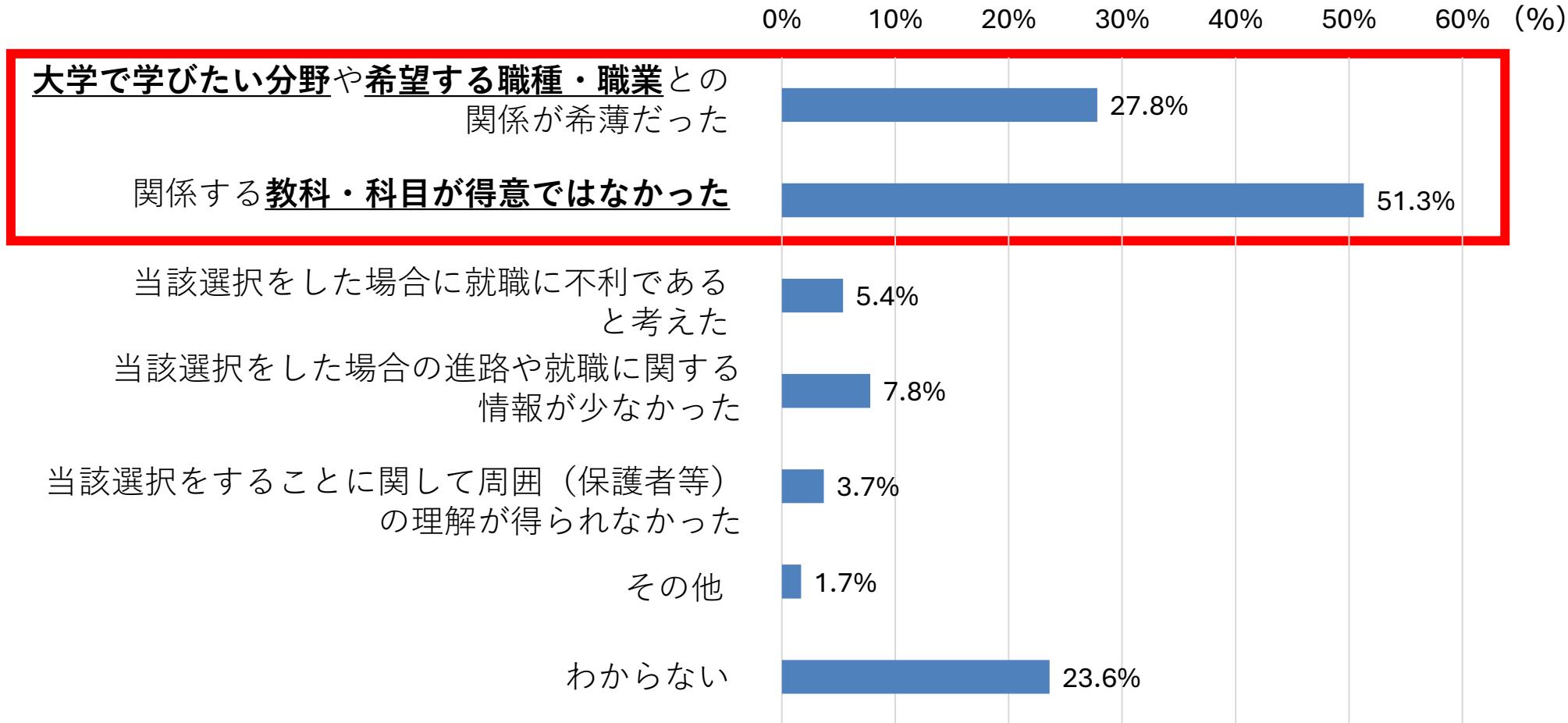
- コース選択時期は高1の10月～12月
- コース開始時期は高2の4月からが大半

※「志向」があっても「学習コース」はなんらかの理由で異なる選択をしている子供も少なくない状況。



理系を選択しない要因

○文系選択者が理系を選択しなかった理由の上位は、「大学で学びたい分野や希望する職種・職業との関係が希薄」という認識や、教科・科目の不得意。

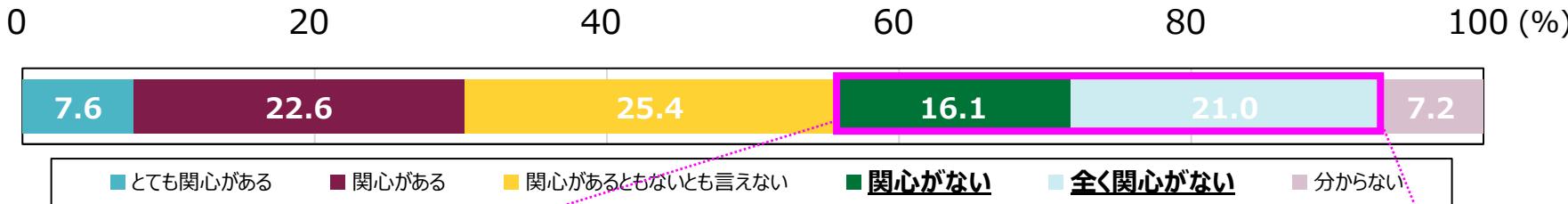


- ・調査時期：令和7年2月
- ・サンプル：1,670 件（最終学歴（在学中を含む）で人文社会科学系と文系（高等学校）の合計、～69歳）

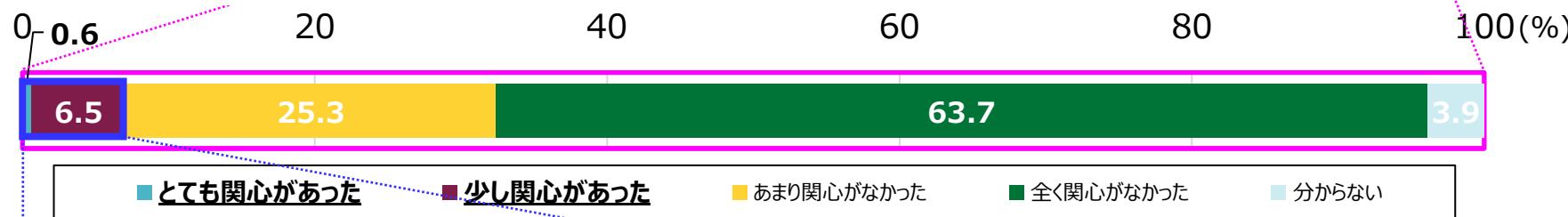
科学技術への興味・関心とその変化

- 15～69歳の国民を対象とした抽出調査によると、現在科学技術への興味・関心が薄い層（①37.1%）も、小学生時代には7.1%が興味・関心を有していた（②）。興味・関心を失った時期を調査したところ、約8割が小学校高学年～高校生の頃と回答（③）。

①科学技術への興味・関心 【現在】



②小学生の頃の科学技術への興味・関心 【過去】



③科学技術への興味・関心の変化の時期

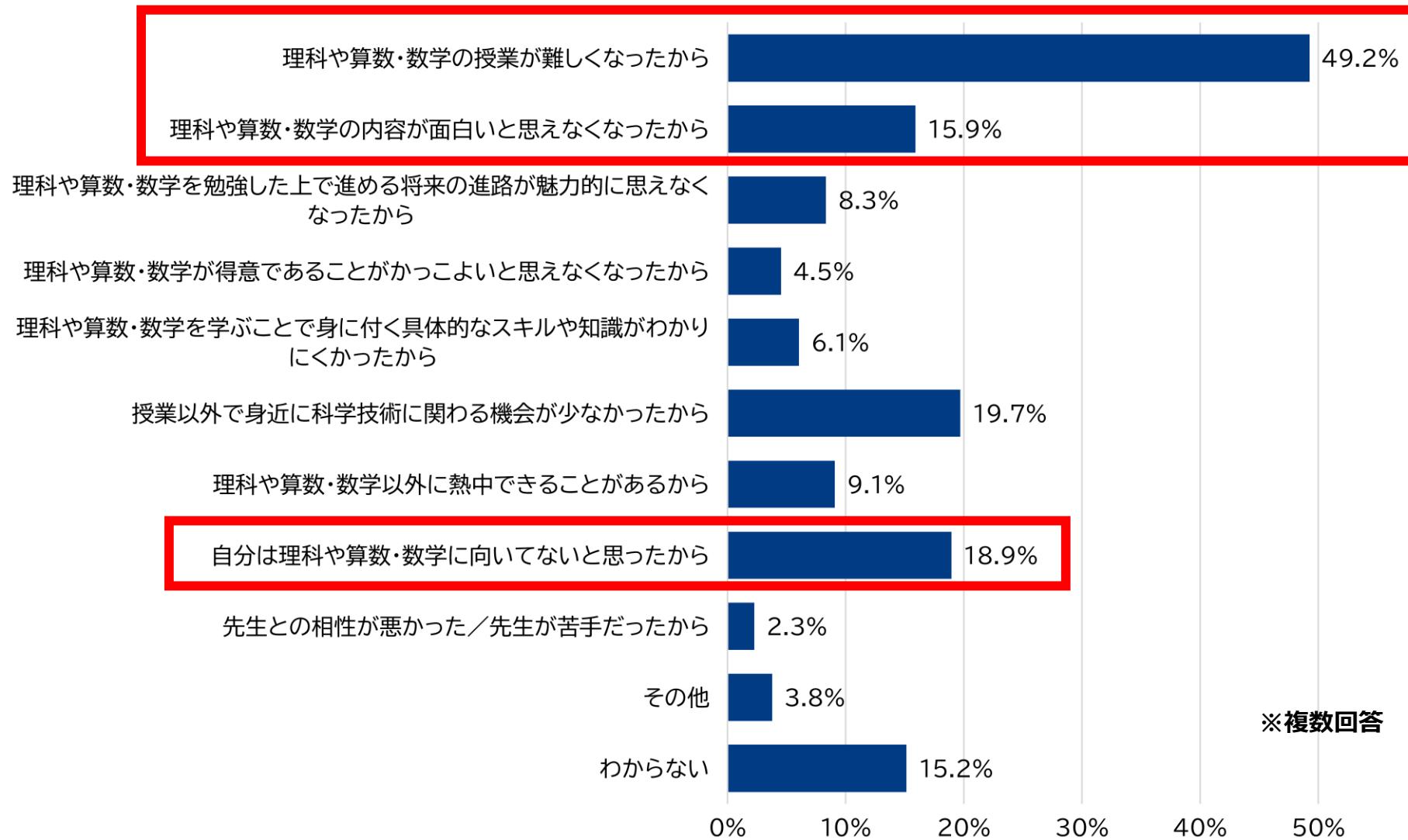


【出典】文部科学省令和6年度科学技術調査資料作成委託事業「今後の科学技術・人材政策のための次世代人材育成等に係る基盤的調査分析」報告書を元に文部科学省作成

※年代：10代（15歳、高校生）～60代（～69歳）、サンプル数：5,000件（男性：2,500件、女性：2,500件）

科学技術への興味・関心が変化した理由

- さらに、科学技術への興味・関心が変化した理由としては、理科や算数・数学の授業・学習を理由とする回答が上位を占めた。



女性の理工系学部入学者は8%（OECD最下位）

(%)

30

25

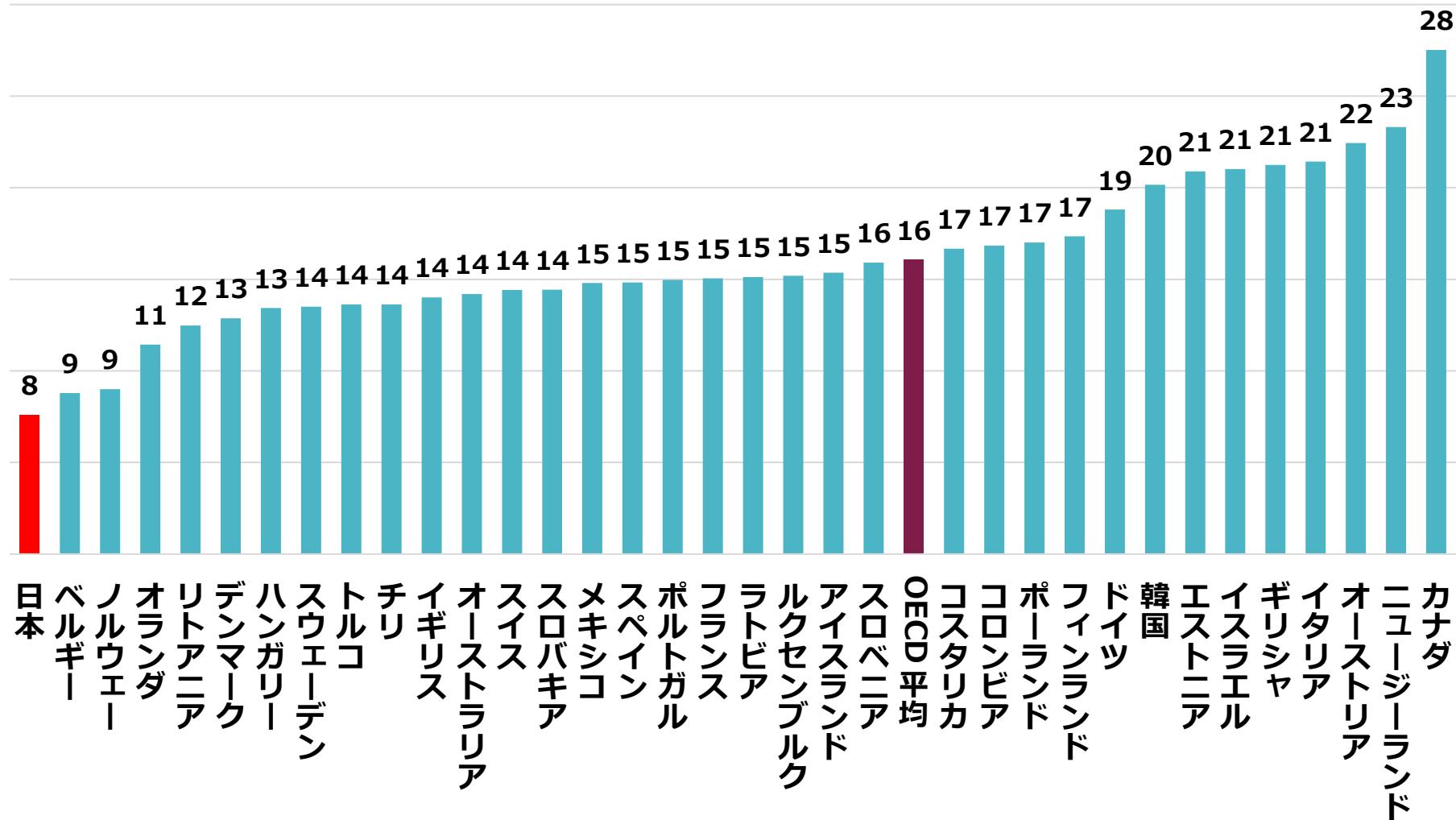
20

15

10

5

0



(備考) “Natural sciences, mathematics and statistics”, “Information and Communication Technologies, “Engineering, manufacturing and construction”を「理工系」に分類される学部系統としてカウント。データは2023年時点。

(出所) OECD.stat「New entrants by field」より作成。

高等教育進学時に理工系進学のジェンダーギャップが存在。各学校段階においてボトルネックが指摘されている。

「Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」(令和4年6月2日より抜粋)

博士
修士

♂♀: ジェンダーギャップ関係

約57万人



高校
中
学
校

理数の学力は世界トップレベル
PISA2018 (高1)

科学的リテラシー2位/37か国
数学的リテラシー1位/37か国

理系 22% 文系 46% 専門 24% その他 8%

理数の学力は世界トップレベル 理科や算数・数学はあまり楽しくない
TIMSS2019 (中2)

理科 3位/39か国 数学 4位/39か国

理系志向 31% 文系志向 31% どちらでもない 6% わからない・無回答等 32%

理数の学力は世界トップレベル 理数への苦手意識が強い
TIMSS2019 (小4)

理科 4位/58か国 算数 5位/58か国

「女の子は女の子らしく育てるべき」
男性保護者: 64.1% 女性保護者: 40.4%



ライフイベントとの両立のしづらさ

研究者として就職した際のライフイベントに伴う研究中断やキャリアパスへの不安



ハラスメントへの不安

研究室におけるハラスメントの事例とその不安

経済的不安

博士課程に進学しない理由のトップは「経済的な不安」

高校段階の学びの変化に対応した学部段階の受け皿がない



例えば、現在のジェンダーバイアスが解消され、高校段階で理数科目を中心に学ぶ女子高校生が増えたとしても、学部段階の受け皿がない

学部教育段階の文理分断

高校段階の文理分断

- 高校段階の文理分断
- 文理の志向が「わからない」中学生が、高校段階で「文系」に流れる

理系の職業にイメージがわからない

例: 安定した進路として薬学・看護学を志向

- 理数はできるが楽しくない・好きでなくなる
- 「理数を使う職業」につきたいと思わない

- 教員の物理・地学・化学への苦手意識
- 抽象度が上がっていく高学年の理科

ジェンダーバイアスがかかり始める

- 女の子は女の子「らしく」
 - 女子は理系には向いていない
 - 女の子なのに算数できてすごいね
- 苦手意識が生まれる

⑬ 女性が理系を選択しない要因の大規模調査

目指す姿



⑫ ライフイベントと両立できる研究環境の整備による不安解消



⑪ ハラスメントの徹底防止
透明性の高い大学運営の確立



⑩ 博士課程学生への継続的な経済的支援の着実な実施



⑨ 学部や修士・博士課程の再編・拡充
ダブルメジャーやバランスの取れた文理選択科目の確保等による文理分断からの脱却



⑦ 入試における探究力の多面的・総合的な評価
高校段階の早期の学習コース分けからの転換による文理分断からの脱却



⑤ 高校普通科改革



④ 産学双方からのロールモデルの発信・職業に関する情報不足の解消



③ 理数の博士号取得者などの専門的な知見のある教師による教科本来の深い学びや実社会につながる学びや探究活動を展開



② 専門性を持った教師が理数科目を担当



① 保護者や学校、社会によるジェンダーバイアスの排除
子供が主体的に進路選択できる環境、社会的ムードメントの醸成

女性が理系を選択しない要因が、それぞれの段階で具体にどう作用したのかを調査・分析し、文理の選択や志向が傾いた要因やタイミングを明らかにし、各施策の立案や改善に活用するための調査を実施

約100万人
一学年あたりの児童・生徒・学生数

大学・高専機能強化支援事業（成長分野をけん引する大学・高専の機能強化に向けた基金）

令和4年度第2次補正予算額

3,002億円

事業創設の背景

- ・デジタル化の加速度的な進展や脱炭素の世界的な潮流は、労働需要の在り方にも根源的な変化をもたらすと予想。
- ・デジタル・グリーン等の成長分野を担うのは理系人材であるが、日本は理系を専攻する学生割合が諸外国に比べて低い。

※ 理系学部の学位取得者割合

【国際比較】日本 35%、仏 32%、米 39%、韓 43%、独 41%、英 44%（出典：文部科学省「諸外国の教育統計」令和5（2023）年版）

【国内比較】国立大学 60%、公立大学 47%、私立大学 29%（出典：文部科学省「令和5年度学校基本調査」）

（注）「理・工・農・医・歯・薬・保健」及びこれらの学際的なものについて「その他」区分のうち推計

- ・デジタル・グリーン等の成長分野をけん引する高度専門人材の育成に向けて、意欲ある大学・高専が成長分野への学部転換等の改革を行うためには、大学・高専が予見可能性をもって取り組めるよう、基金を創設し、安定的で機動的かつ継続的な支援を行う。

支援の内容

① 学部再編等による特定成長分野（デジタル・グリーン等）への転換等（支援1）

- 支援対象：私立・公立の大学の学部・学科（理工農の学位分野が対象）
- 支援内容：学部再編等に必要な経費（検討・準備段階から完成年度まで）
定率補助・20億円程度まで、原則8年以内（最長10年）支援
- 受付期間：令和14年度まで

② 高度情報専門人材の確保に向けた機能強化（支援2）

- 支援対象：国公私立の大学・高専（情報系分野が対象。大学院段階の取組を必須）
- 支援内容：大学の学部・研究科の定員増等に伴う体制強化、
高専の学科・コースの新設・拡充に必要な経費
定額補助・10億円程度まで、最長10年支援
※ハイレベル枠（規模や質の観点から極めて効果が見込まれる）は20億円程度まで支援
- 受付期間：原則令和7年度まで

【事業スキーム】

文部科学省

↓ 基金造成

（独）大学改革支援・学位授与機構
(NIAD-QE)

↓ 助成金交付



大学・高専



大学・高専機能強化支援事業

(成長分野をけん引する大学・高専の機能強化に向けた基金)

令和8年度要求・要望額

9億円
(新規)

※令和4年度第2次補正予算額

3,002億円

事業実績・成果

- これまで3回の公募により、合計261件を選定 合計約2.2万人(※)の理系分野の入学定員増
⇒ 地方大学を中心に全国的な成長分野に係る定員の増加に寄与

(※)既存の理系分野から成長分野への転換も含む

(例)桃山学院大学

桃山学院大学
St. Andrew's University



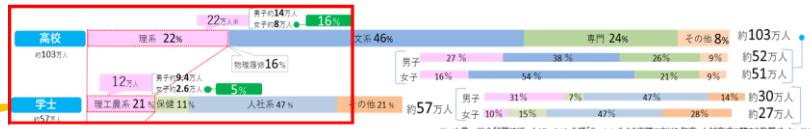
< 2040年における就業構造の推計 >

現状・課題

- 少子高齢化に加え、2040年には、生産年齢人口の減少による働き手不足により、我が国の社会経済構造は大きく転換。
- 一方で、今後求められる理系人材を輩出する理系学部定員が未だ少ない状況。
- 特に、定員のボリュームゾーンである大都市圏の大規模大学における理系転換が求められるが、現状の基金事業では十分には対応しきれていない課題もあり、進んでいない状況。(主な課題：理系学部設置のための高額な施設・設備投資や土地確保、教員確保(人件費含む)、受験生確保、文系学部の規模・質の適正化等)
- 成長分野における即戦力となる人材育成を行う高専について、公立高専の新設の動きもある状況。



<理系学部定員の少なさ>



将来の社会・産業構造変化を見据え、大規模大学を含めて、成長分野への学部等転換を一層強力に推進

取組内容

① 学部再編等による特定成長分野（デジタル・グリーン等）への転換等（支援1）

○支援対象：私立・公立の大学の学部・学科（理工農の学位分野が対象）※原則8年以内（最長10年）支援

○支援内容：①「成長分野転換枠」（継続分）・学部再編等に必要な経費20億円程度まで（定額補助）

②「大規模文理横断転換枠」「新設」 大規模大学を含め、文理横断の学部再編等を対象とした支援枠を新設

- 施設設備等の上限額を引き上げるとともに、支援対象経費に「新設理系学部の教員人件費」、「土地取得費」、「定員減の文系学部の質向上支援（例：ST比改善支援等）」等を追加
- 高校改革を行う自治体、DXハイスクール・SSHとの継続的な連携や、大学院の設置・拡充、産業界との連携実施の場合に上限額・助成率引き上げ
- 理系・文系学部の定員増減数、収容定員の理系比率、教育課程や入学者選抜における工夫等の要件・確認を実施

○受付期間：令和14年度まで

② 高度情報専門人材の確保に向けた機能強化（支援2）

※国公私立の高専（情報系分野）を対象に、受付期間を原則令和10年度まで延長 大学・高専

(支援内容は原則継続（10億円程度まで（定額補助）、最長10年支援等）)

期待される効果

大規模大学の学部再編等も契機にしつつ、我が国の大学等の文理分断からの脱却を含む成長分野への組織転換を図ることで、社会経済構造の変化に対応できる人材を育成・輩出し、一人一人の豊かさや我が国の国際競争力の向上、新たな価値の創造等に資する

(担当：高等教育局専門教育課)

【事業スキーム】

文部科学省



基金造成



(独)大学改革支援・学位授与機構 (NIAD-QE)



助成金交付

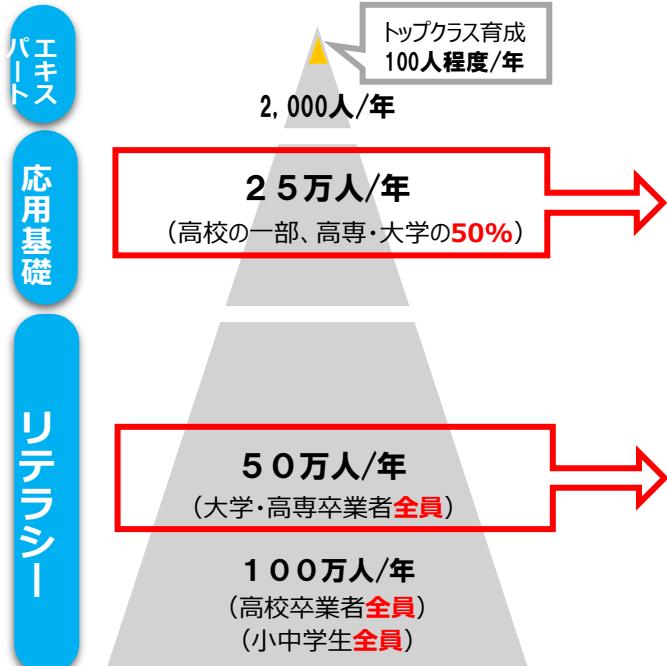
数理・データサイエンス・AI教育プログラム（MDASH）認定制度

AI戦略2019

（令和元年6月統合イノベーション戦略推進会議決定）

AIに関する産業競争力強化や技術開発等についての総合戦略を策定。この中で2025年までの人材育成目標を設定

育成目標【2025年】



CLICK

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/00001.htm

制度概要

大学・高等専門学校の数理・データサイエンス・AI教育に関する正規課程教育のうち、一定の要件を満たした優れた教育プログラムを政府が認定し、取り組みを後押し！



【応用基礎レベル】

文理を問わず、自らの専門分野で、数理・データサイエンス・AIを活用して課題を解決するための実践的な能力を育成

2022年度より、応用基礎レベルの認定開始

→ 366件 (249校) の教育プログラムを認定 (2025年8月時点)

※ 1学年あたりの受講可能な学生数：約25万人



【リテラシーレベル】

学生の数理・データサイエンス・AIへの関心を高め、適切に理解し活用する基礎的な能力を育成

2021年度より、リテラシーレベルの認定開始

→ 592件 (590校) の教育プログラムを認定 (2025年8月時点)

※ 1学年あたりの受講可能な学生数：約55万人



4. 児童生徒の学力状況

PISA2022 (得点の国際比較)

日本:日本の平均得点と統計的な有意差がない国

- 15歳段階での科学的リテラシーは世界トップレベルを維持。

OECD加盟国
(37か国)

順位	数学的リテラシー	平均得点	読解力	平均得点	科学的リテラシー	平均得点
1	日本	536	アイルランド*	516	日本	547
2	韓国	527	日本	516	韓国	528
3	エストニア	510	韓国	515	エストニア	526
4	スイス	508	エストニア	511	カナダ*	515
5	カナダ*	497	カナダ*	507	フィンランド	511
6	オランダ*	493	アメリカ*	504	オーストラリア*	507
7	アイルランド*	492	ニュージーランド*	501	ニュージーランド*	504
8	ベルギー	489	オーストラリア*	498	アイルランド*	504
9	デンマーク*	489	イギリス*	494	スイス	503
10	イギリス*	489	フィンランド	490	スロベニア	500
OECD平均		472	OECD平均	476	OECD平均	485

全参加国・地域
(81か国・地域)

順位	数学的リテラシー	平均得点	読解力	平均得点	科学的リテラシー	平均得点
1	シンガポール	575	シンガポール	543	シンガポール	561
2	マカオ	552	アイルランド*	516	日本	547
3	台湾	547	日本	516	マカオ	543
4	香港*	540	韓国	515	台湾	537
5	日本	536	台湾	515	韓国	528
6	韓国	527	エストニア	511	エストニア	526
7	エストニア	510	マカオ	510	香港*	520
8	スイス	508	カナダ*	507	カナダ*	515
9	カナダ*	497	アメリカ*	504	フィンランド	511
10	オランダ*	493	ニュージーランド*	501	オーストラリア*	507

【出典】OECD生徒の学習到達度調査PISA2022のポイント(国立教育政策研究所)から作成

国名の後に「」が付されている国・地域は、PISAサンプリング基準を一つ以上満たしていないことを示す。

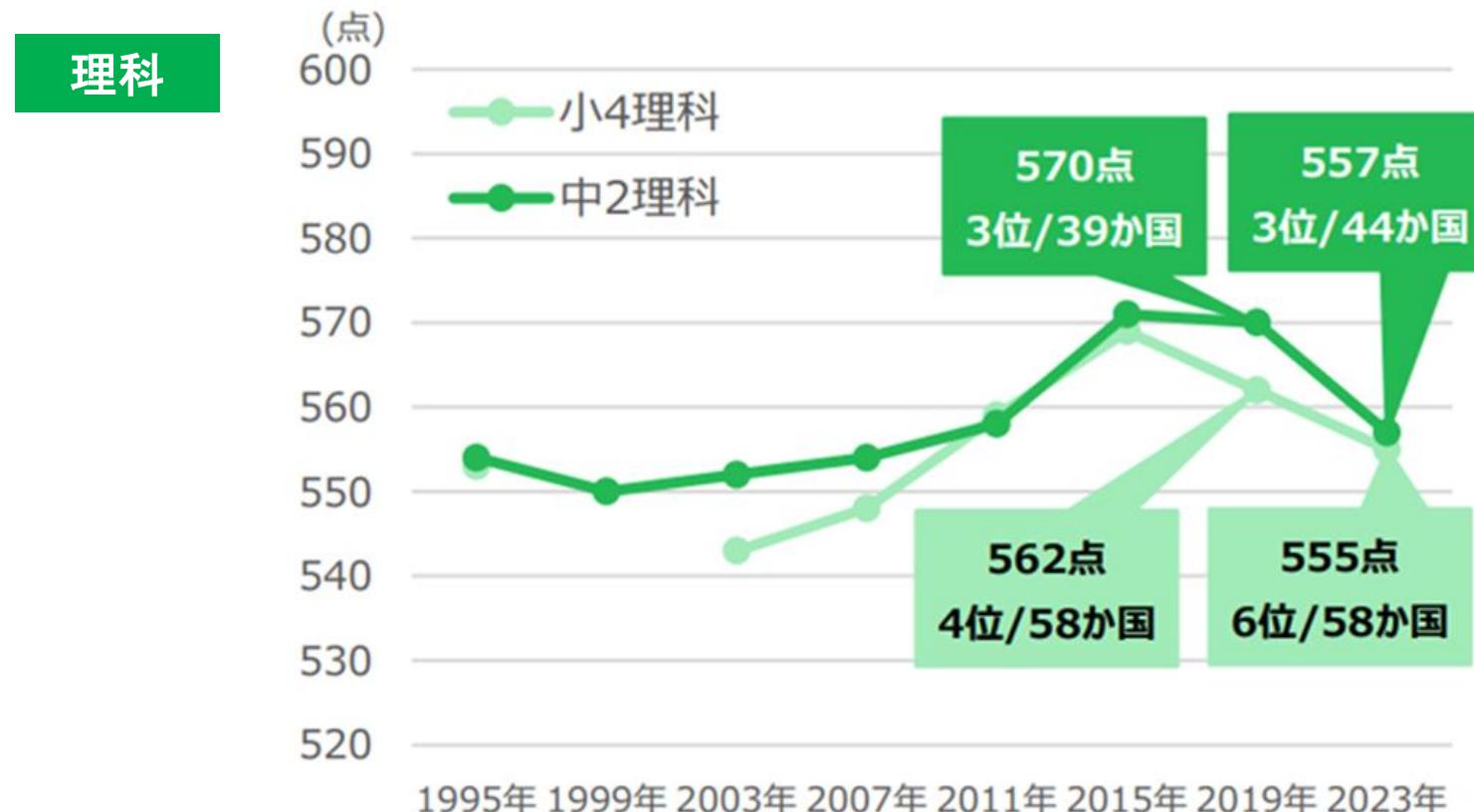
TIMSS2023（日本の平均得点）

- 小4・中2段階でも、年度による変動はあるが、引き続き高い水準を維持。

【2023平均得点】

小4 理科：555点（6位 / 58か国）

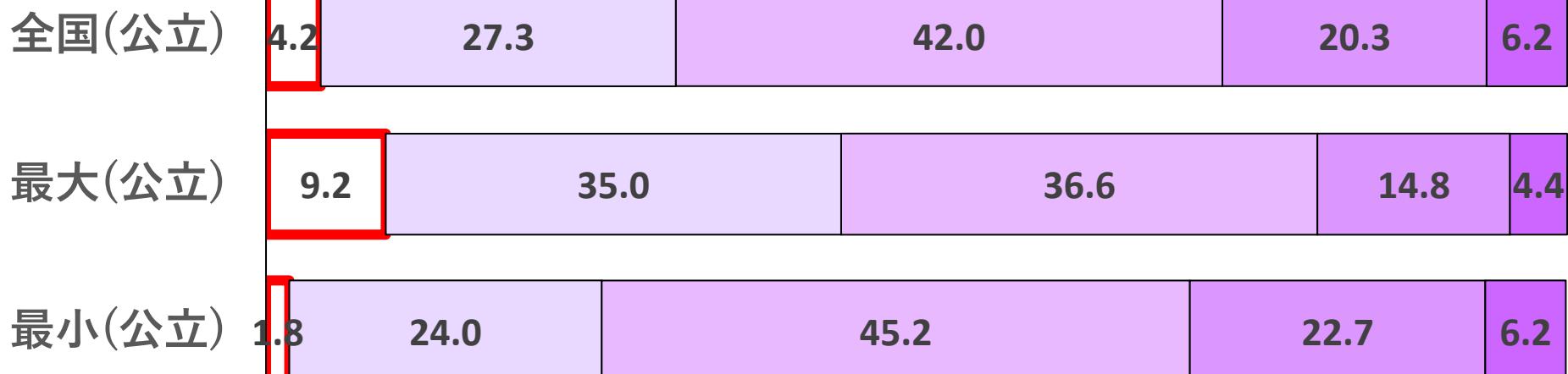
中2 理科：557点（3位 / 44か国）



令和7年度全国学力・学習状況調査 【中学・理科】のIRTスコア結果

- ※ 中学校理科はIRT（項目反応理論）に基づき算出したスコアにより結果を表示している。
- 各都道府県・指定都市のバンドの層分布は、全国的な傾向と大きな差はみられない。
- ただし、一部の都道府県・指定都市においては、全国（公立）と比べて
 - ・バンド1（スコア317以下）の生徒の割合が2倍以上多い。
 - ・バンド1の生徒の割合が1/2以下となっている。

中・理科



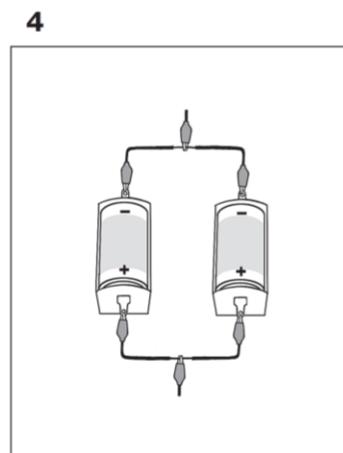
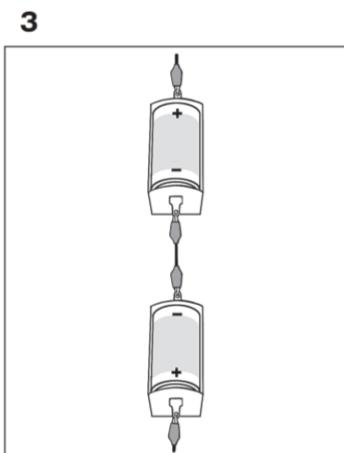
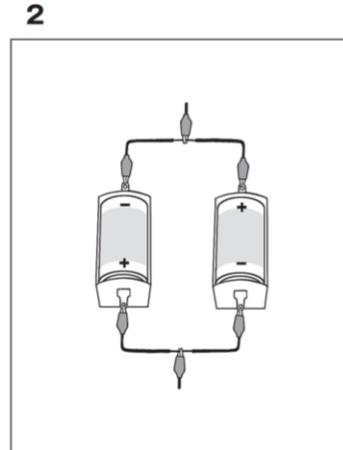
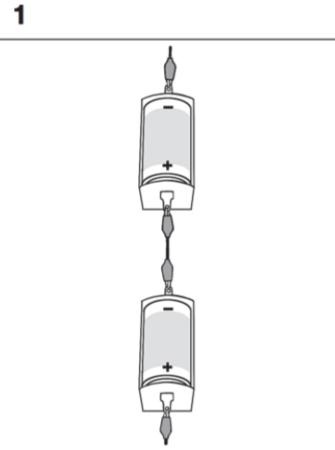
※ 3を基準とし、5を最も高いバンドとしている。

【出典】令和7年度全国学力・学習状況調査の結果公表③のポイント（令和7年9月）

令和7年度全国学力・学習状況調査 理科の出題例①

小学校② の (4)

(4) かん電池 2 個を直列につなぎ、でんじしゃく 電磁石の強さを最も強くできるのは、
どのようなつなぎ方ですか。下の 1 から 4 までの中から 1 つ選んで、
その番号を書きましょう。



回路に流れる電流が大きくなる電池のつなぎ
方を問う問題【知識】

	回答	反応率 (%)
正解	1	55.3
	2	25.4
	3	8.9
	4	9.4
	上記以外	0.1
	無回答	0.8

令和7年度全国学力・学習状況調査 理科の出題例②

中学校5の(3)



ドライアイス（二酸化炭素）の中で、マグネシウムは燃焼するでしょうか。動画を見て、図を参考にしてその結果を考察しましょう。



動画



図

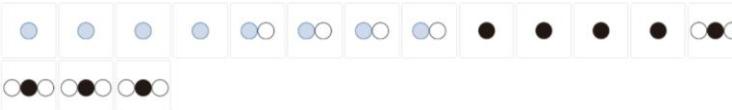
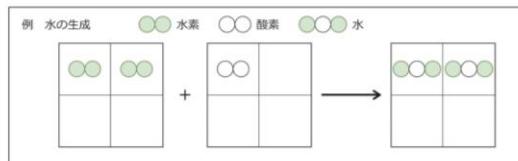


二酸化炭素の中では、火は消えると思いましたが、燃焼しました。
何が起きているか、化学変化をモデルで表しました。

(2)

マグネシウム原子○、二酸化炭素○●○、酸化マグネシウム○○、炭素●と表したとき、下線部の化学変化はどのように表すことができますか。「例 水の生成」を参考にして、□にモデルを移動して、化学変化をモデルで表してください。

なお、使用しないモデルもあります。



化学反応を原子や分子モデルを使って表現する問題【分析・解釈】

	回答	反応率 (%)
正解	物質を正しくモデルで表現し、最も簡単な整数比で回答	30.4
準正答	物質を正しくモデルで表現し、最も簡単な整数比ではない	5.4
	物質を正しくモデルで表現し、反応の前後で原子の種類や数が異なる	8.4
	1つの枠に複数の物質のモデルを当てはめている	0.1
	それぞれの枠に物質のモデル1つで表している	3.2
	左辺が生成物、右辺が反応物として回答	3.6
	上記以外	44.3
	無回答	4.6

令和7年度全国学力・学習状況調査 理科に関する児童生徒質問調査結果（男女差）

- 平均正答率・スコアを比較すると、小・中学校とも大きな男女差は見られない（わずかに女子が男子を上回った）。一方、「好き」「授業の内容がよく分かる」「得意」と回答する割合は、女子が男子を下回った。

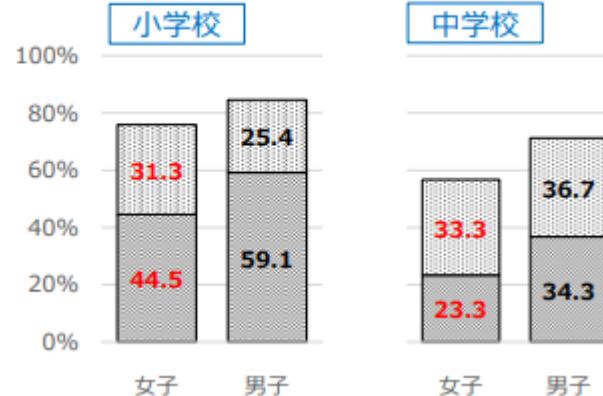
平均正答率・スコア（男女別）

	小・理科	中・理科
男子 (a)	55.8%	503
女子 (b)	58.8%	508
女子 (b) – 男子 (a)	3.0	5

*差を算出した後に、小数第2位を四捨五入

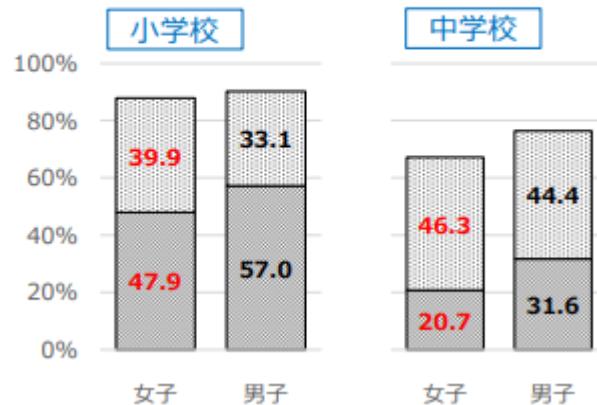
児童(61)
生徒(61)

理科の勉強は好きだ。



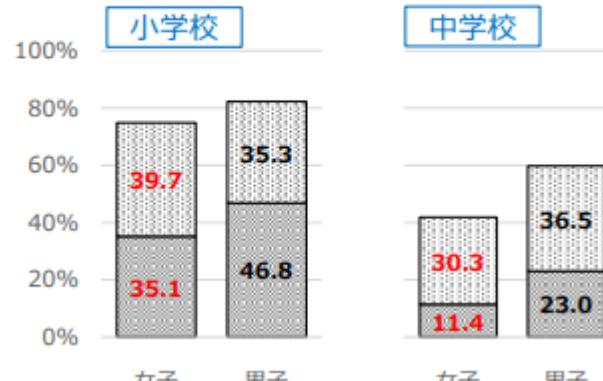
児童(62)
生徒(62)

理科の授業の内容はよく分かる。



児童(60)
生徒(60)

理科の勉強は得意だ。（新規）



5．児童生徒の学習状況等

TIMSS2023（児童生徒の回答）

- 理科の勉強が「日常生活に役立つ」「楽しい」と回答する児童生徒の割合は、増加傾向にあるものの、特に中学生では依然国際平均を下回る状況。
- 「楽しい」は小学校では国際平均を上回るが、中学校になると下回る状況。

—●— 日本 -●- 国際平均

理科を勉強すると、日常生活に役立つ



理科の勉強は楽しい

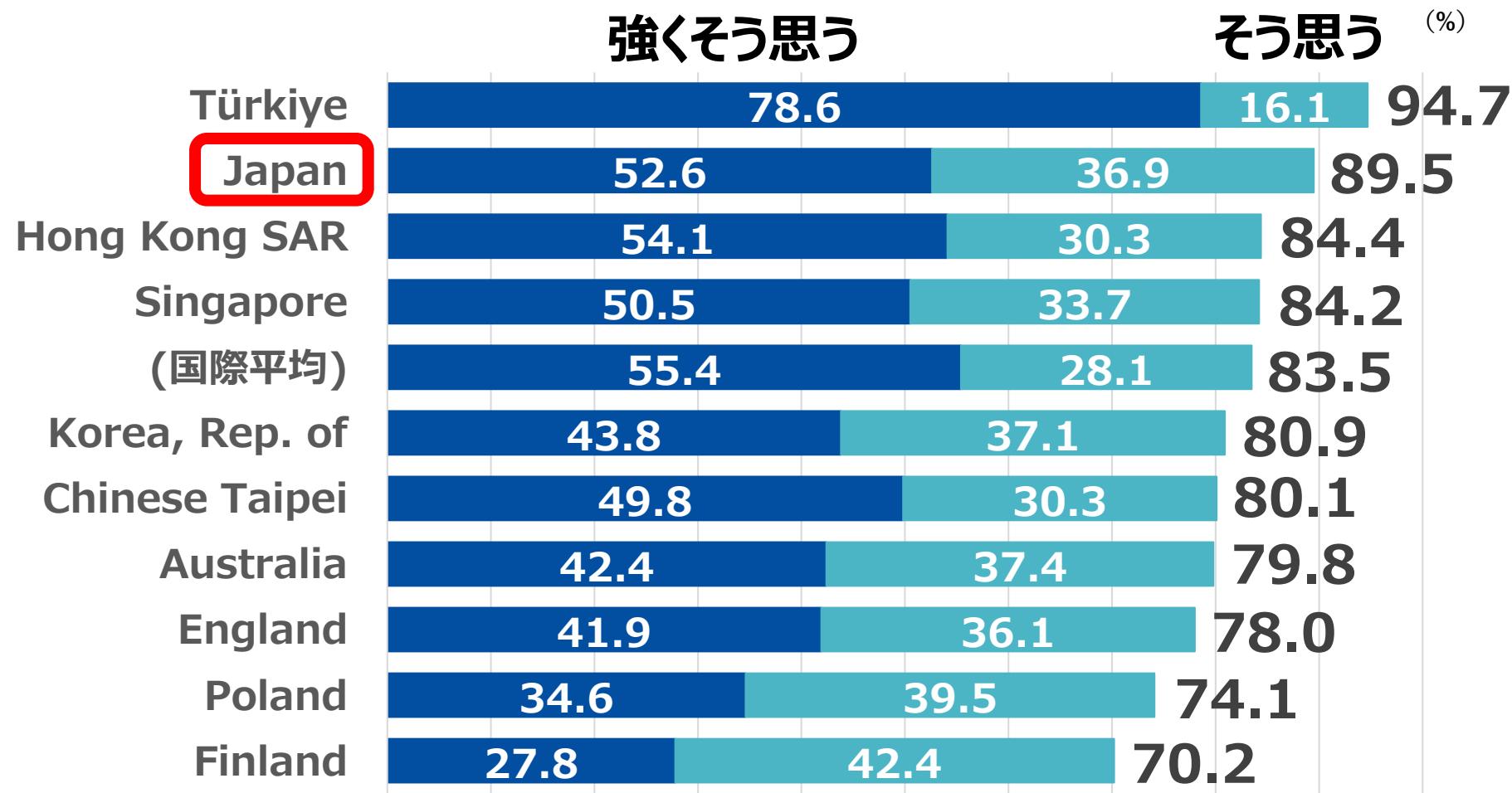


※ 数値は「強くそう思う」「そう思う」と回答した児童生徒の割合

小・理科トップ10比較

「理科の勉強は楽しい」トップクラス

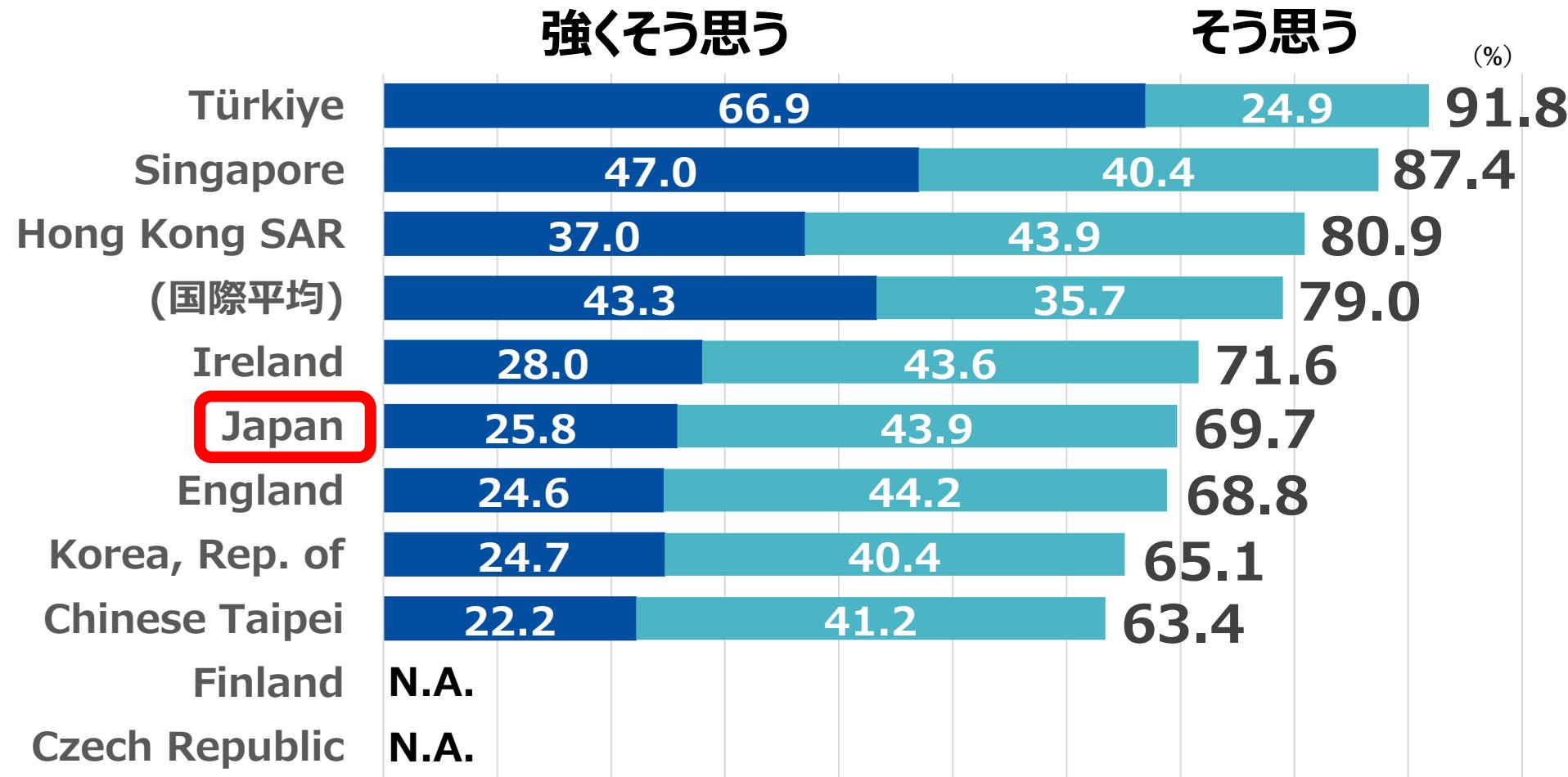
(トップと5ポイント差、「強くそう思う」に限ると26ポイント差)



中・理科トップ10比較

「理科の勉強は楽しい」比較的下位

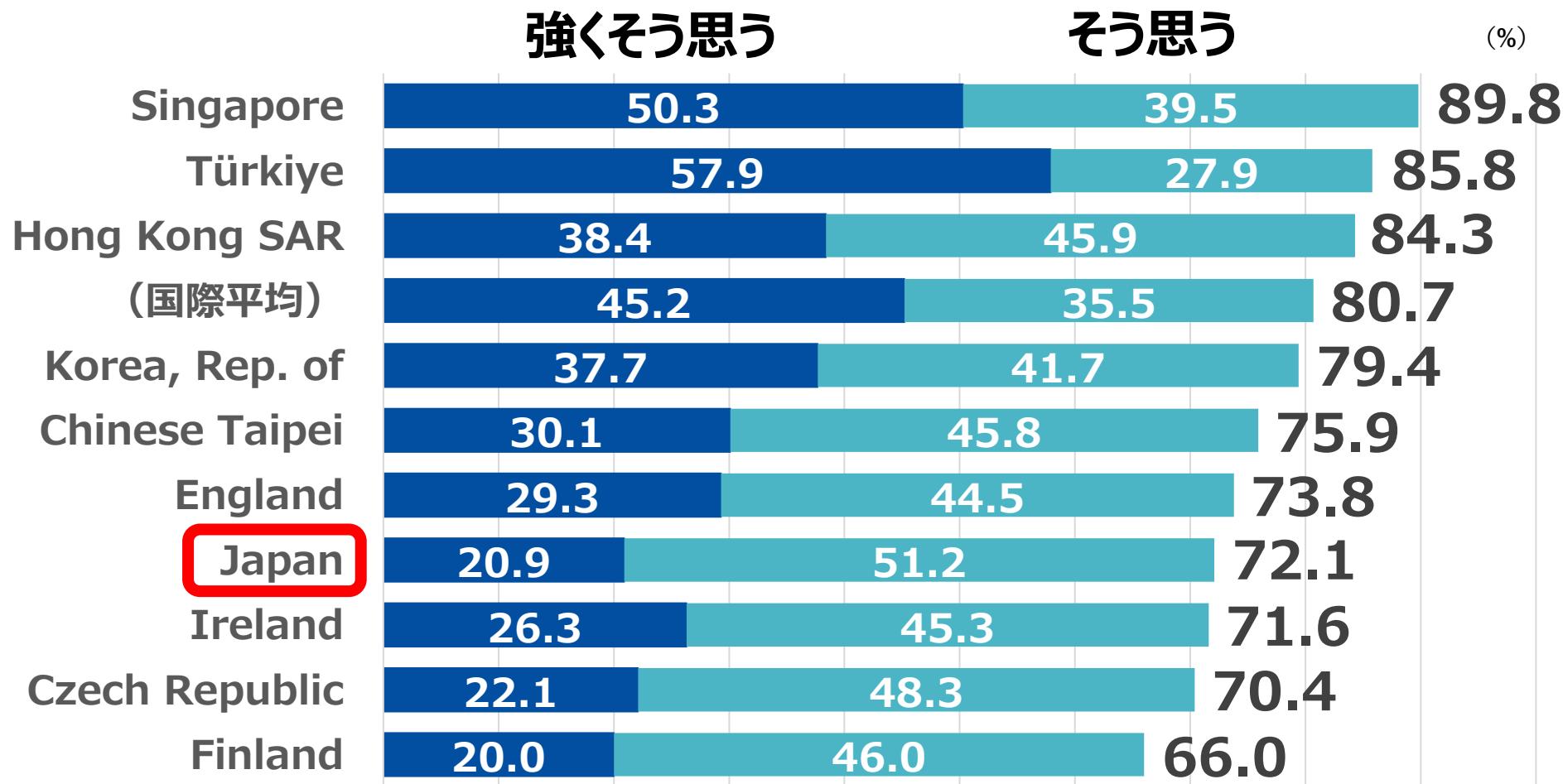
(トップと22ポイント差、「強くそう思う」に限ると41ポイント差)



中・理科トップ10比較

「理科を勉強すると、日常生活に役に立つ」比較的下位

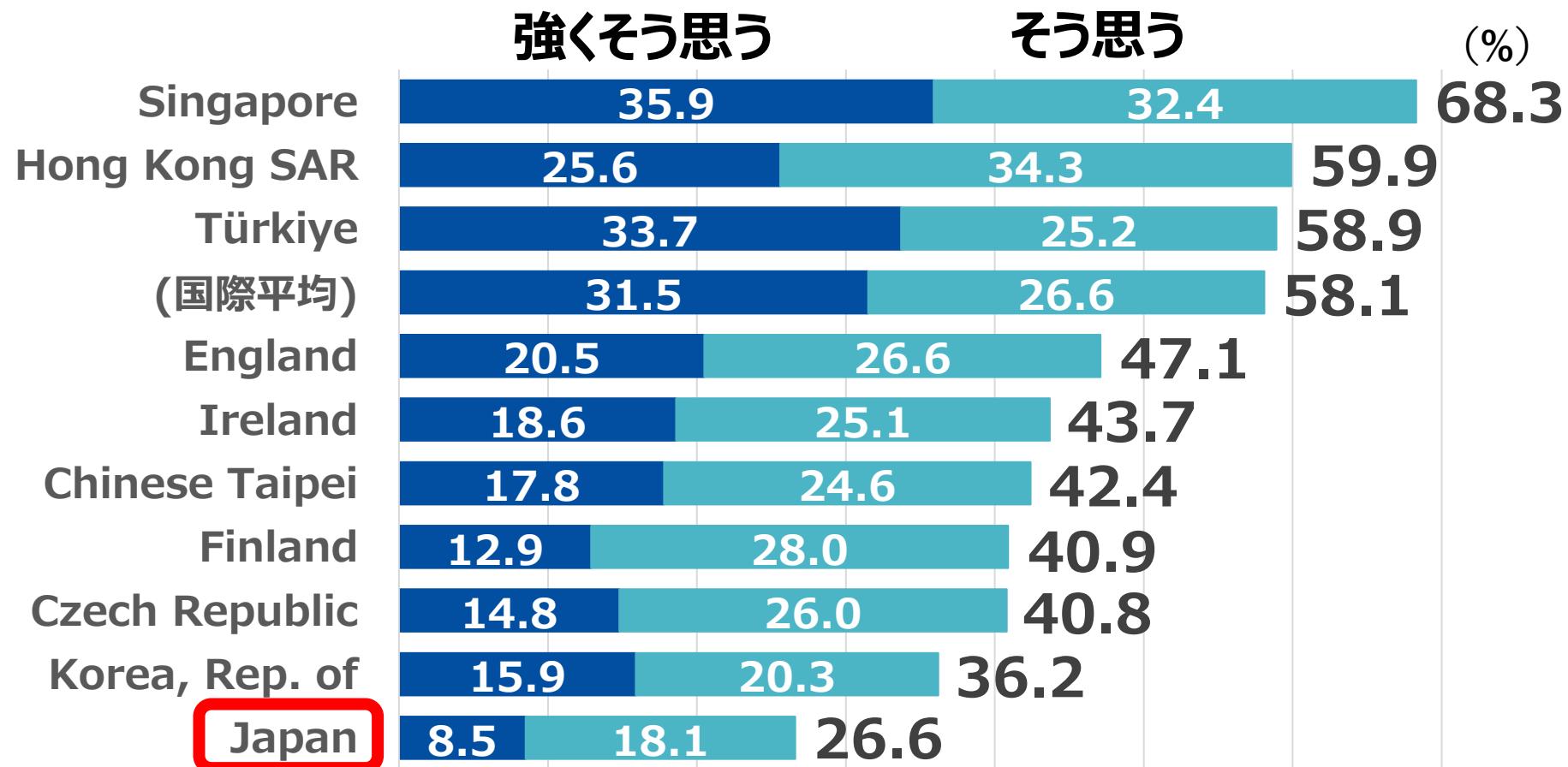
(トップと18ポイント差、「強くそう思う」に限ると29ポイント差)



中・理科トップ10比較

「理科を使う職業につきたい」最下位

(トップと42ポイント差、「強くそう思う」に限っても27ポイント差)

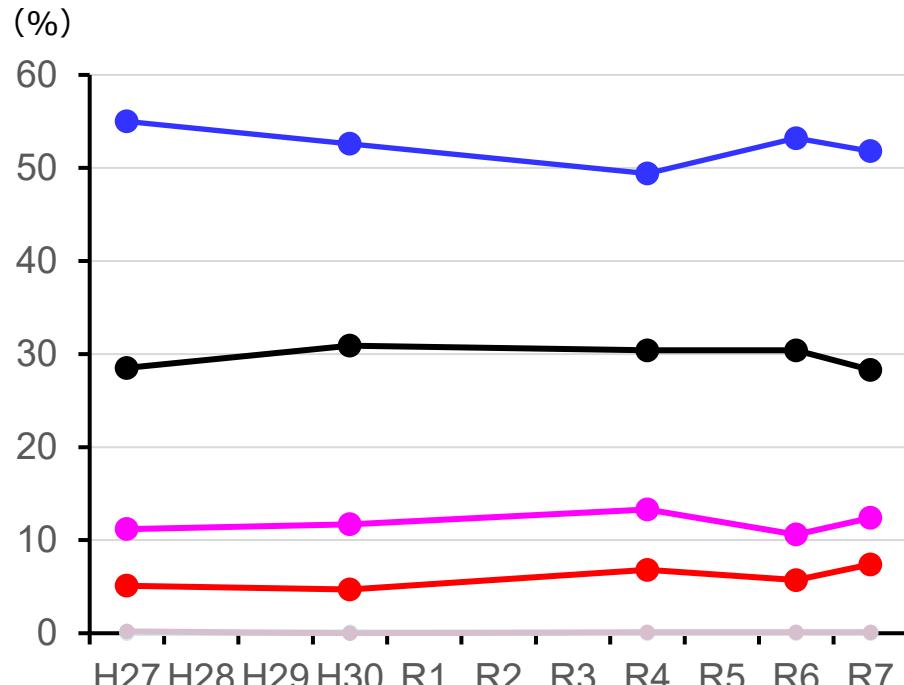


【出所】TIMSS2023より文部科学省において分析（「強くそう思う」+「そう思う」と回答した生徒の合計）

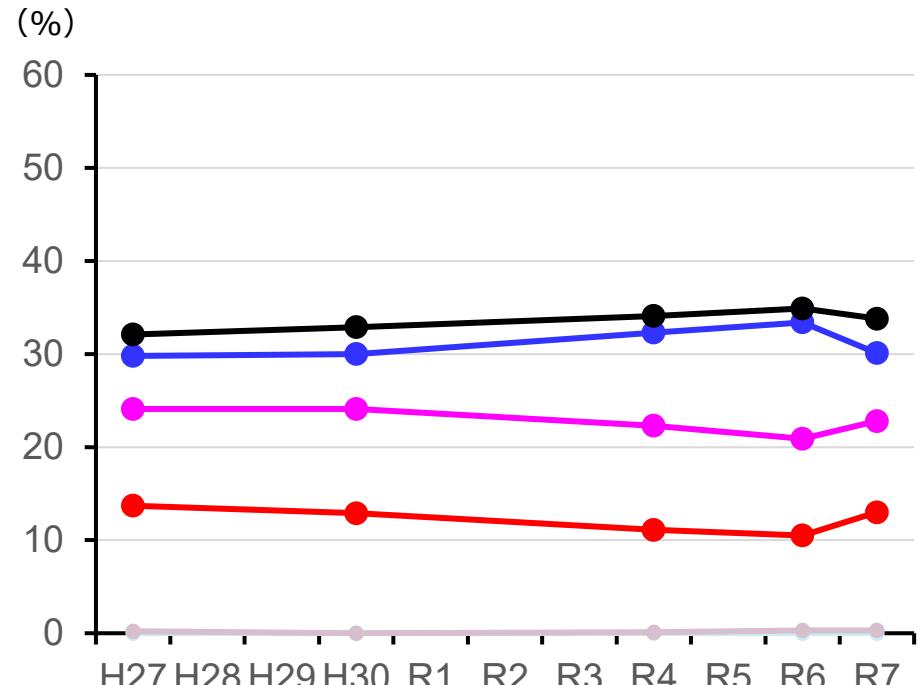
全国学力・学習状況調査における児童生徒質問調査結果（理科関係）①

理科の勉強は好きですか

【小学生 6 年】



【中学生 3 年】

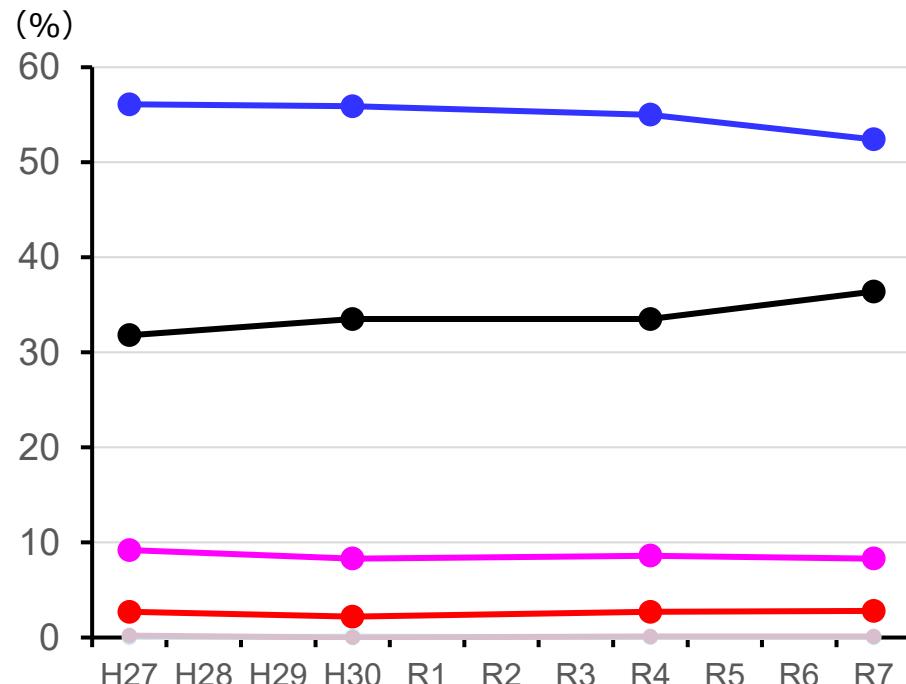


- 当てはまる
- どちらかといえば、当てはまる
- どちらかといえば、当てはまらない
- 当てはまらない
- その他
- 無回答

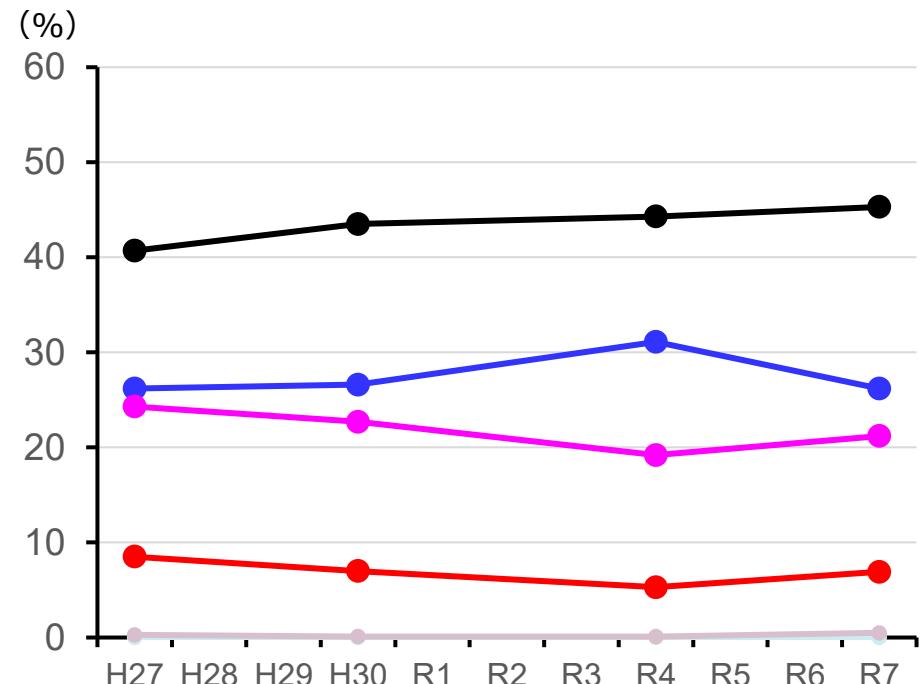
全国学力・学習状況調査における児童生徒質問調査結果（理科関係）②

理科の授業の内容はよく分かりますか

【小学生 6 年】



【中学生 3 年】

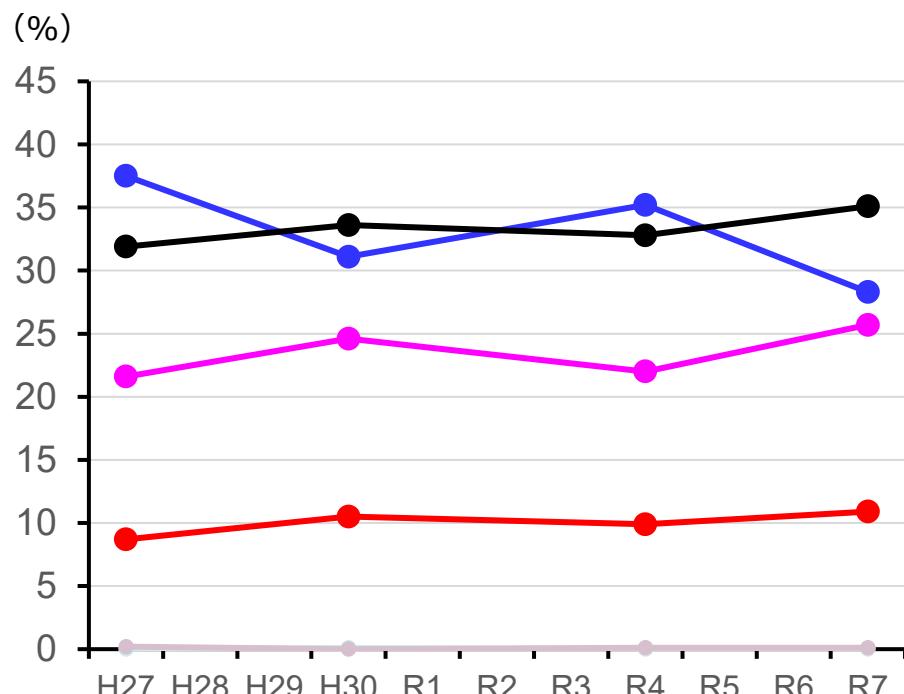


- 当てはまる
- どちらかといえば、当てはまる
- どちらかといえば、当てはまらない
- 当てはまらない
- その他
- 無回答

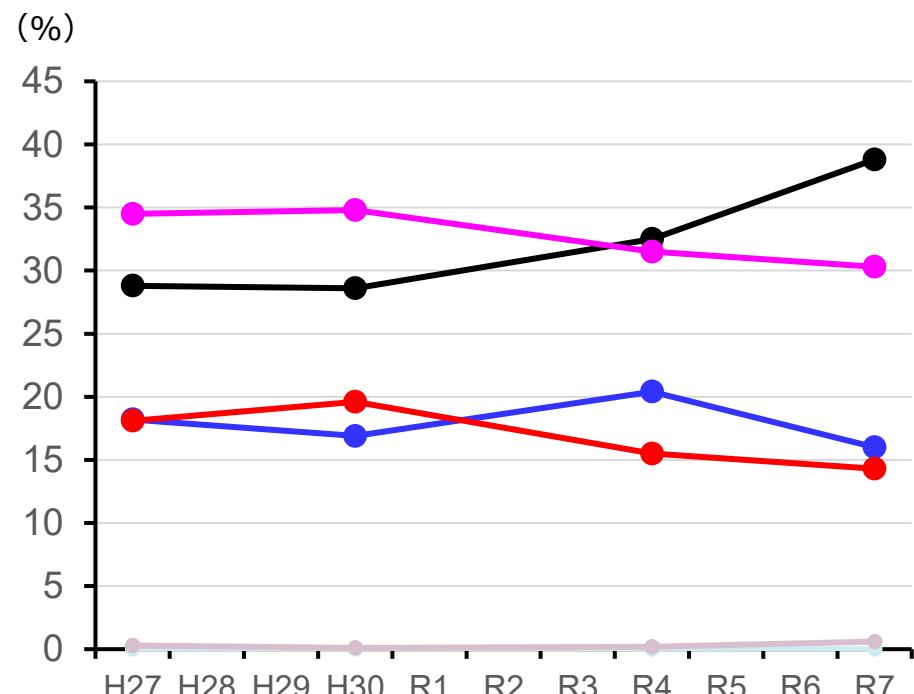
全国学力・学習状況調査における児童生徒質問調査結果（理科関係）③

理科の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか（～R6）/活用できていますか（R7）

【小学生 6 年】



【中学生 3 年】

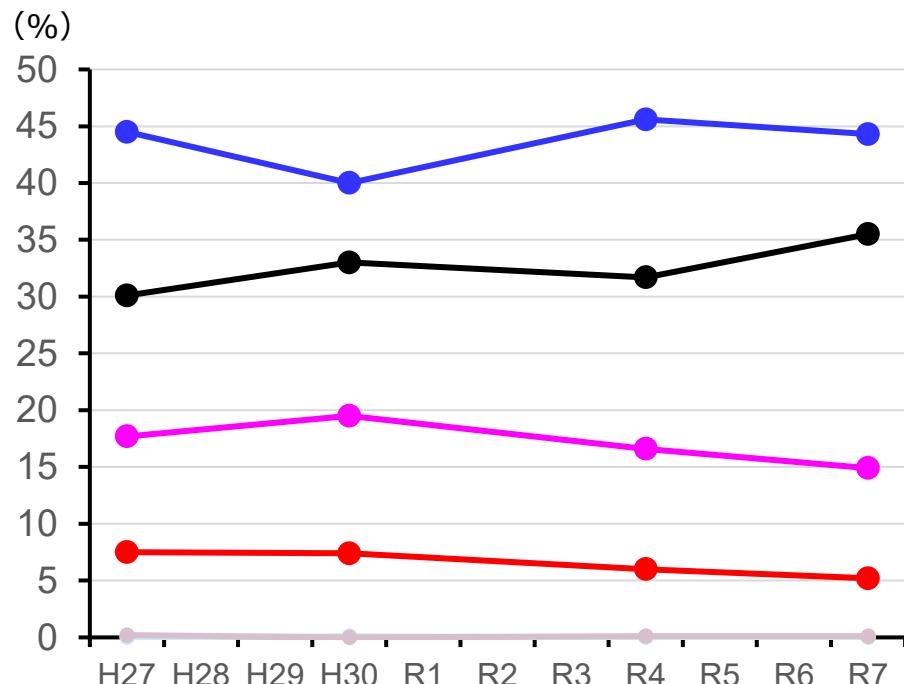


- 当てはまる
- どちらかといえば、当てはまる
- どちらかといえば、当てはまらない
- 当てはまらない
- その他
- 無回答

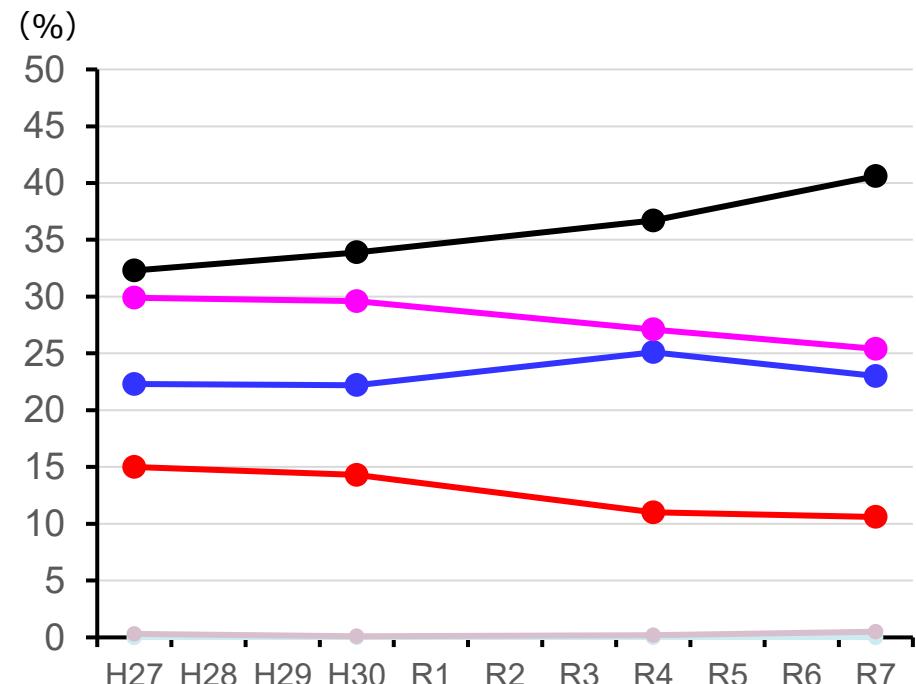
全国学力・学習状況調査における児童生徒質問調査結果（理科関係）④

理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか

【小学生 6 年】



【中学生 3 年】

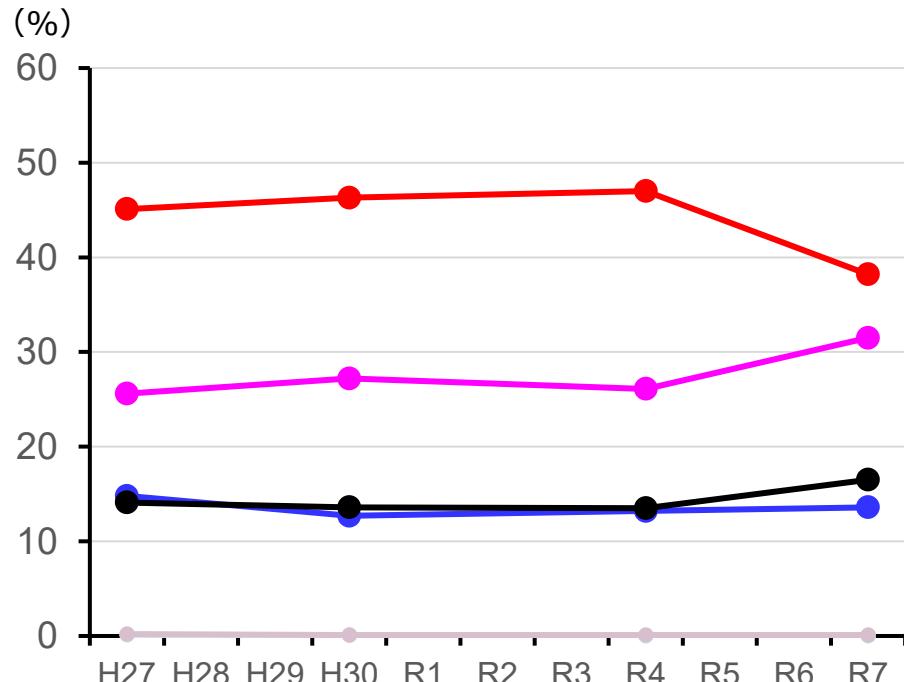


- 当てはまる
- どちらかといえば、当てはまる
- どちらかといえば、当てはまらない
- 当てはまらない
- その他
- 無回答

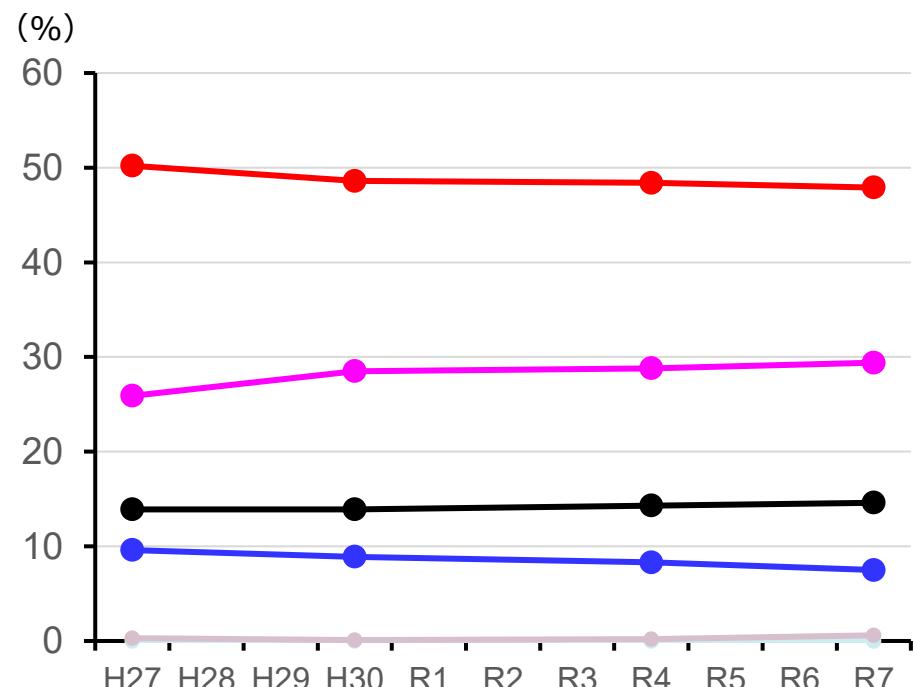
全国学力・学習状況調査における児童生徒質問調査結果（理科関係）⑤

将来、理科や科学技術に関する職業に就きたいと思いますか

【小学生 6 年】

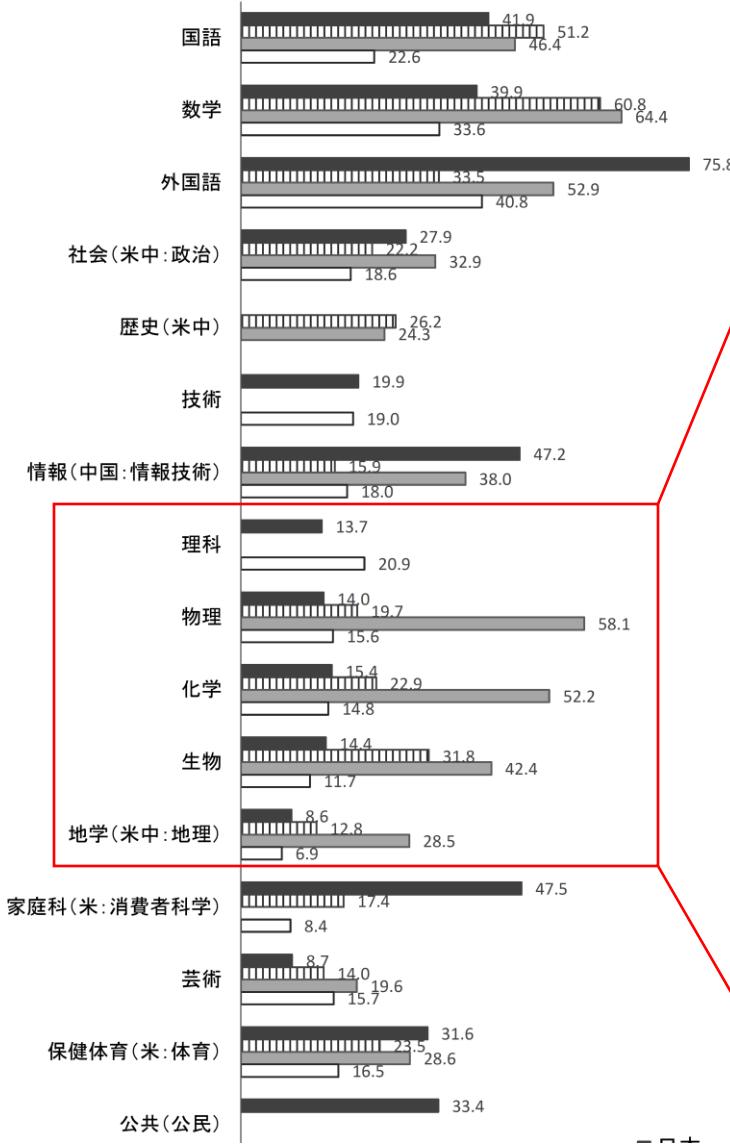


【中学生 3 年】

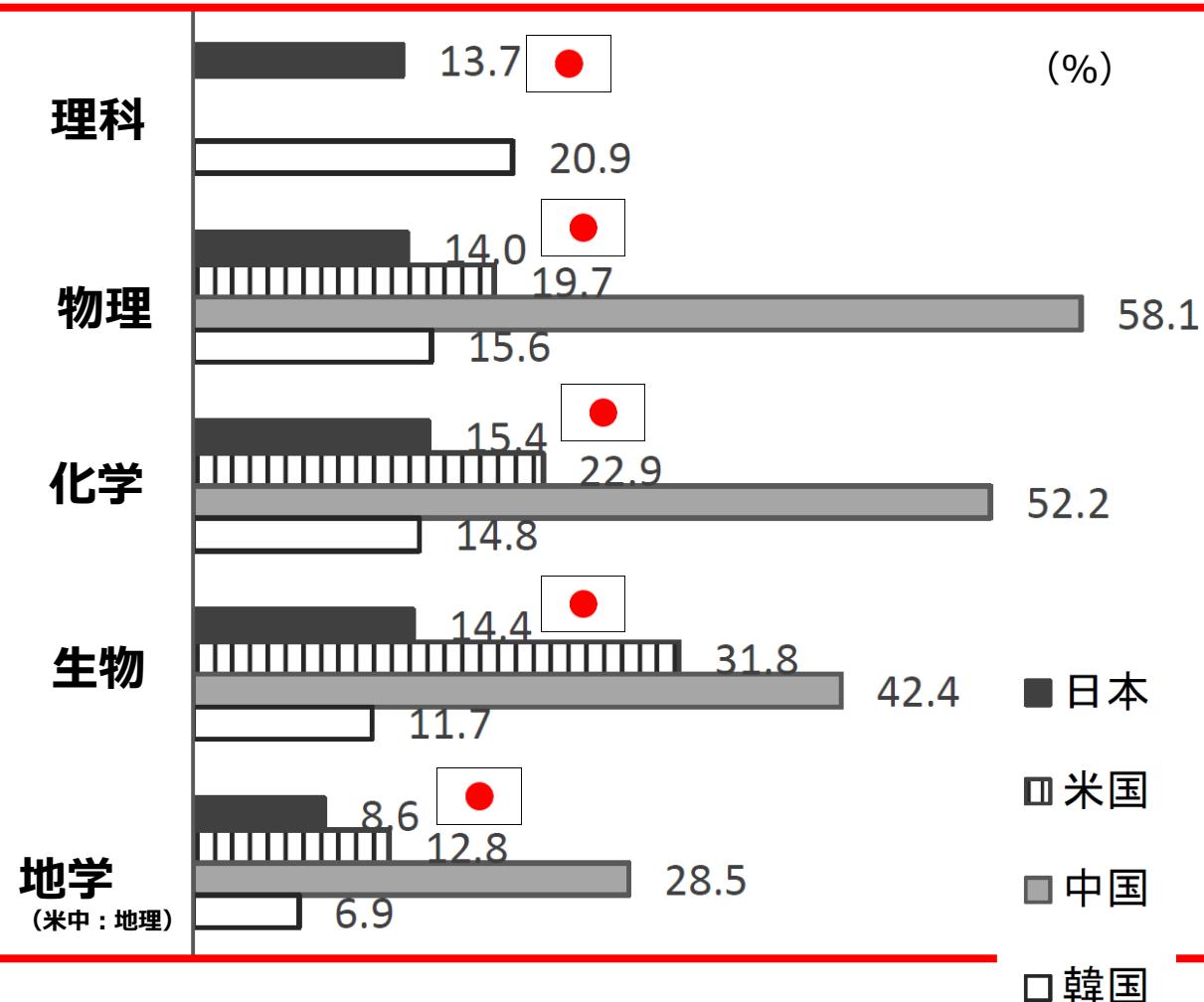


- 当てはまる
- どちらかといえば、当てはまる
- どちらかといえば、当てはまらない
- 当てはまらない
- その他
- 無回答

高校生が「将来役に立つと思う」科目についての国際比較（複数回答）



○ 日・米・中・韓の高校生を対象とした調査では、理科（物理・化学・生物・地学）について「将来役に立つと思う」と回答した割合は、我が国の高校生は米中に比べると低い状況。

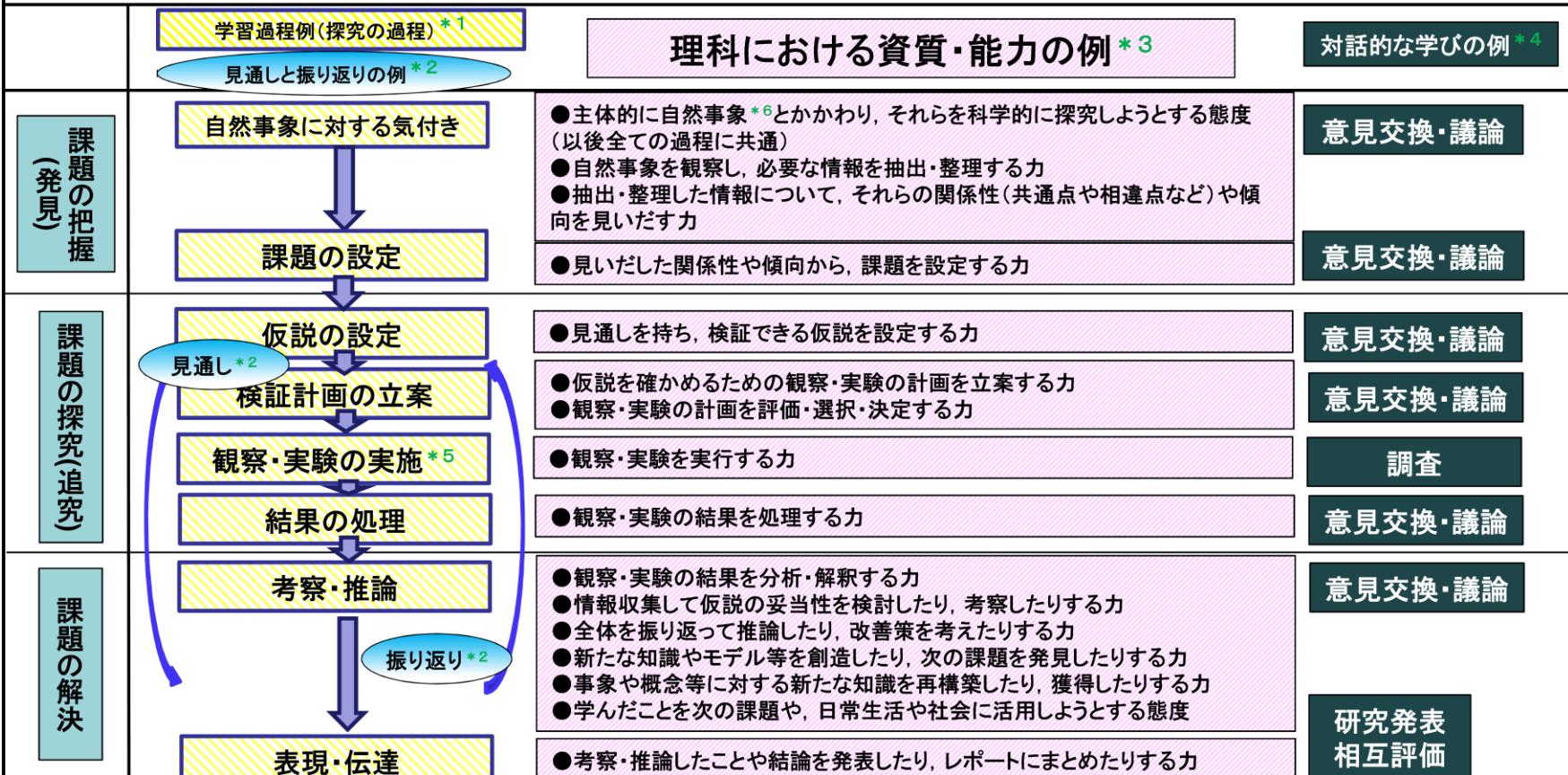


6. 探究的な学び、文理横断・文理融合

理科における探究の過程

資質・能力を育成するために重視すべき学習過程のイメージ(高等学校基礎科目の例^{*7})

別添5-4



*1 探究の過程は、必ずしも一方向の流れではない。また、授業では、その過程の一部を扱ってもよい。

*2 「見通し」と「振り返り」は、学習過程全体を通してのみならず、必要に応じて、それぞれの学習過程で行うことも重要である。

*3 全ての学習過程において、今までに身に付けた資質・能力や既習の知識・技能を活用する力が求められる。

*4 意見交換や議論の際には、あらかじめ個人で考えることが重要である。また、他者とのかかわりの中で自分の考えをより妥当なものにする力が求められる。

*5 単元内容や題材の関係で観察・実験が扱えない場合も、調査して論理的に検討を行うなど、探究の過程を経ることが重要である。

*6 自然事象には、日常生活に見られる事象も含まれる。

*7 小学校及び中学校においても、基本的には高等学校の例と同様の流れで学習過程を捉えることが必要である。

理科で重視する「探究の過程(中学校・高校)」と「問題解決の過程(小学校)」のイメージ

- 学校段階間における学習過程の用語の違いが教師を混乱させている現状があることから、小中高の接続を改善する観点からも、統一を検討してはどうか。



我が国におけるイノベーションを担う人材の育成に向けて、小中学校段階からのSTEAM教育、理数教育の充実を図ることが、政府の諸計画に位置付けられている。

◎（第4期）教育振興基本計画（令和5年6月16日閣議決定）

IV. 今後5年間の教育政策の目標と基本施策

目標5 イノベーションを担う人材育成

複雑かつ困難な社会課題の解決や持続的な社会の発展に向けて、新たな知を創り出し、多様な知を持ち寄って「総合知」として活用し、新たな価値を生み出す創造性を有して既存の様々な枠を越えて活躍できる、イノベーションを担う人材を育成する。

【基本施策】

○探究・STEAM 教育の充実

- 学習指導要領を踏まえ、**児童生徒が主体的に課題を自ら発見し、多様な人と協働しながら課題を解決する探究学習や STEAM 教育等の教科等横断的な学習の充実を図る。**
- 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、普通科改革や先進的なグローバル・理数系教育、産業界と一体となった実践的な教育等を始めとした高等学校改革を通じて、地域、高等教育機関、行政機関等との連携を推進する。
- 生徒の探究力の育成に資する取組を充実・強化するため、先進的な理数教育を行う高等学校等を支援するとともに、その成果の普及を図る。
- 探究・STEAM・アントレプレナーシップ教育を支える企業や大学、研究機関等と学校・子供をつなぐプラットフォームの構築や、日本科学未来館やサイエンスアゴラ等の対話・協働の場等を活用したSTEAM機能強化や地域展開等を推進する。

※STEAM= (Science, Technology, Engineering, Liberal Arts, Mathematics)

学校教育におけるSTEAM教育等の教科等横断的な学習の推進

- AIなどの急速な技術の進展により社会が激しい変化が生じている今日、文系・理系といった枠にとらわれず、各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用・統合しながら、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結び付けていく資質・能力の育成が求められている。

→ STEM (Science, Technology, Engineering, Mathematics) に加え、芸術、文化、生活、経済、法律、政治、倫理等を含めた広い範囲でAを定義し、各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていくための教科等横断的な学習を推進することが重要

文理の枠を超えたカリキュラム・マネジメントの充実

- ・ 文理の枠を超えた教科等横断的な視点で教育課程を編成・実施
- ・ 各学校の教育目標と総合的な探究の時間等の目標との関連を図る
- ・ 各教科の教師の専門性を生かした協働体制を構築
- ・ 学校外リソースを活用するための連携体制を整備
- ・ ICT活用のための環境を整備

各教科等における探究的な学習活動の充実

- ・ 各教科等の特質に応じた見方・考え方を働きながら、実社会の課題を取り扱う探究的な学習活動を充実



総合的な探究の時間、理数探究等を中心とした探究活動の充実

- ・ 複数の教科等の見方・考え方を総合的・統合的に働きながら、実社会の課題を取り扱い探究する活動を充実

理学、工学、芸術、人文・社会科学等を横断した学際的なアプローチにより、実社会の問題を発見し解決策を考えることを通じた主体的・対話的で深い学びを実現

- ✓ 知的好奇心や探究心を引き出すとともに学習の意義の実感により学習意欲向上
- ✓ 文理の枠を超えた複合的な課題を解決し新たな価値を創造するための資質・能力を育成

外部関係機関による支援

- ・ 民間企業、大学、研究機関、社会教育施設、地域の団体等の関係機関との連携を推進
- ・ 学校と外部専門人材、コンテンツ等とのマッチングを通じて、「社会に開かれた教育課程」の実現を促進

STEAMの各分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民、新たな価値を創造し社会の創り手として必要な資質・能力を育成

7. 教育環境

理科の観察・実験機器の整備状況①

- 理科の観察・実験に必要な機器の充足率は100%を下回る状況。

観察・実験機器の整備充足率

	小学校	中学校	高等学校
最重点設備（※）	78.7%	65.1%	—
重点設備（※）	—	—	22.1%

(出典) 公益社団法人日本理科教育振興協会 「観察・実験」こそ理科教育の基本です！パンフレット
令和7年度全国小・中・高等学校観察実験機器充足調査結果（全国の小中高等学校を対象とした
任意回答調査）を元に文部科学省作成

※「理科教育設備整備費等補助金交付要綱」において、設備整備を計画的・効果的に進めていくため、優先的な整備に努めるものとされている設備。

(例)

【最重点設備】

小学校：気体採取器、電子てんびん、筋肉付腕の骨格模型、てこ実験器 等

中学校：力学的エネルギー実験器、双眼実体顕微鏡、顕微鏡、顕微鏡保管庫 等

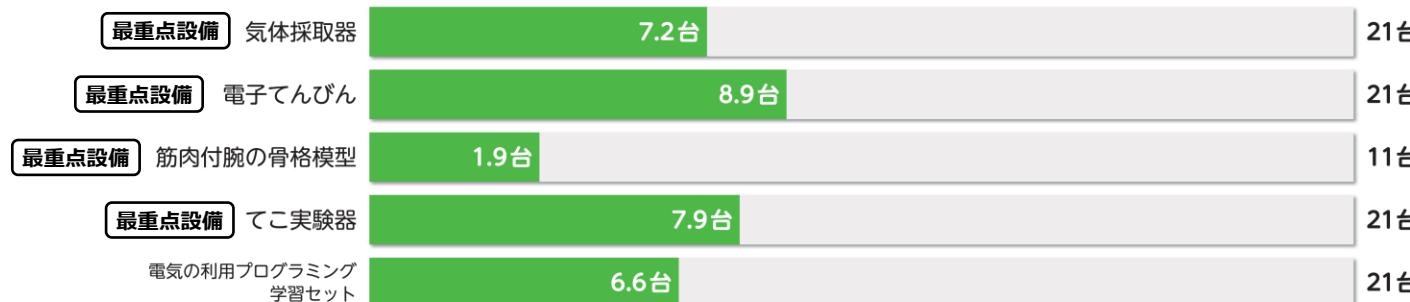
【重点設備】

高等学校：精密電子てんびん、レーザー光源装置、オシロスコープ、顕微鏡保管庫 等

理科の観察・実験機器の整備状況②

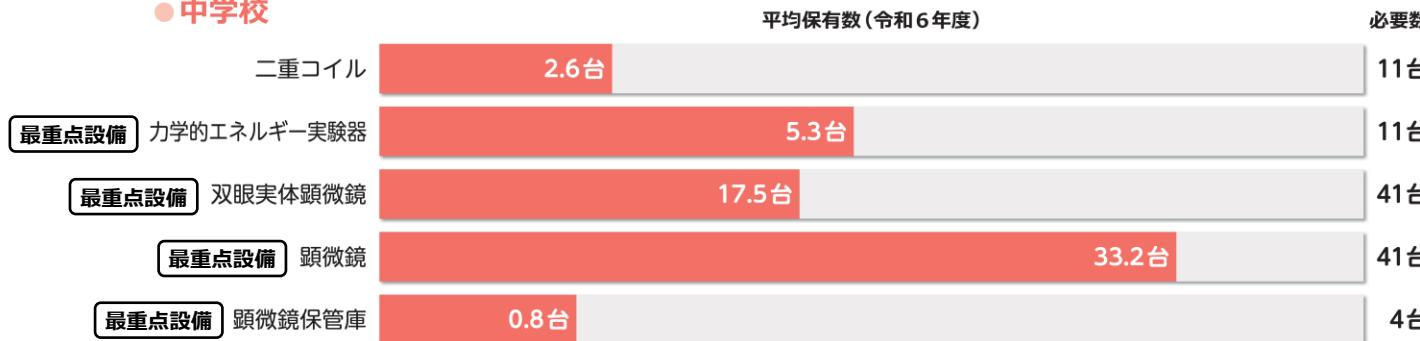
- 学校種や機器によっても整備状況は大きく異なる。

● 小学校

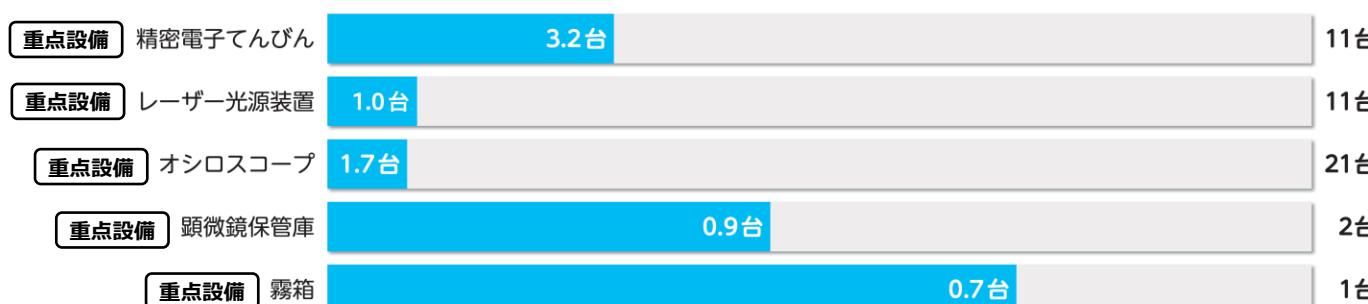


※必要数とは40人学級で算出した数
41台→1人1台
21台→2人で1台
11台→4人で1台

● 中学校



● 高等学校



(出典) 公益社団法人日本理科教育振興協会「観察・実験」こそ理科教育の基本です!パンフレット
令和7年度全国小・中・高等学校観察実験機器充足調査結果(全国の小中高等学校を対象とした任意回答調査)

を元に文部科学省作成

GIGAスクール構想のもとでの理科の指導において ICTを活用する際のポイント

(1) ICTを活用する際に求められる観点

- ・理科の学習においては、自然の事物・現象に直接触れ、観察、実験を行い、課題の把握、情報の収集、処理、一般化などを通じて科学的に探究する力や態度を育て、理科で育成を目指す資質・能力を養うことが大切である。
- ・観察、実験などの指導に当たっては、直接体験が基本であるが、指導内容に応じて、適宜コンピュータや情報通信ネットワークなどを適切に活用することによって、児童生徒の学習の場を広げたり、学習の質を高めたりすることができる。

「観察、実験の代替」としてではなく、理科の学習の一層の充実を図るための有用な道具としてICTを位置付け、活用する場面を適切に選択し、教師の丁寧な指導の下で効果的に活用することが重要。

(2) 理科の特質に応じたICT活用

例えば…

- ・観察、実験のデータ処理やグラフ作成 → 規則性や類似性を見いだす
- ・カメラとICT端末の組合せ → 観察、実験の結果の分析や総合的な考察を裏付ける
- ・センサを用いた計測 → 通常では計測しにくい量や変化を数値化・視覚化して捉える
- ・シミュレーション → 観測しにくい現象を分析したり、検証したりする
- ・情報の検索 → 探究の過程や問題解決の過程で必要となる情報を取得する
- ・クラウド上で共有 → 各班の実験結果を比較したり、児童生徒がそれぞれが行った考察を交流したりする

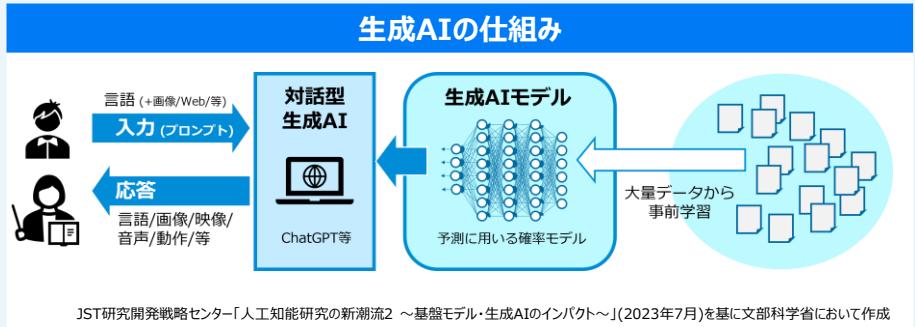
初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン(Ver. 2.0)【概要】

教職員や教育委員会等の学校教育関係者を主たる読み手として、学校現場における生成AIの適切な利活用を実現するための参考資料となるよう、生成AIの概要や基本的な考え方、場面や主体に応じて押さえておくべきポイントをまとめたもの。



1. 生成AIについて

- 生成AIは急速に普及し、文章だけでなく動画像や音声等、異なる種類の情報をまとめて扱えるようになり、人間の反応と遜色ないスピードで応答ができるようになっている。
- 学校現場においても、汎用的なサービスが利用可能なだけでなく、標準仕様のブラウザや学習支援ソフトウェア等にも組み込まれ、利活用の幅が広がりつつある。
- 誤った出力（ハルシネーション）を完全に防ぐことは難しいとされているほか、学習過程・出力過程の信頼性・透明性への懸念、大量のデータに潜む偏見や差別等のバイアスをそのまま再生成することなど、様々なリスクも指摘されている。一方で、これらのリスクを軽減する技術等も進展している。



JST研究開発戦略センター「人工知能研究の新潮流2～基盤モデル・生成AIのインパクト～」(2023年7月)を基に文部科学省において作成

2. 基本的な考え方

①学校現場における人間中心の利活用

人間中心の原則



- 生成AIを人間の能力を補助、拡張し、可能性を広げてくれる有用な道具になり得るものと捉えるべきである。その上で、出力はあくまでも「参考の一つである」ことを認識するとともに、リスクや懸念を踏まえつつ、最後は人間が判断し、責任を持つことが重要である。
- 学習指導要領に示す資質・能力の育成に寄与するか、教育活動の目的を達成する観点から効果的であるかを吟味した上で利活用するべきであり、生成AIを利活用することが目的であってはならない。
- 指導計画や学習環境の設定、丁寧な見取りと支援といった、学びの専門職としての教師の役割は、より重要なものになる。
- 生成AIの仕組みや特徴を理解するなど、教師には一定のAIリテラシーを身に付けることが求められる。

児童生徒の学びと生成AI



教師の役割と生成AI



②生成AIの存在を踏まえた情報活用能力の育成強化

学習の基盤となる資質・能力としての情報活用能力



情報活用能力の育成強化



- 学習指導要領では、「情報活用能力」を学習の基盤となる資質・能力として位置付け、情報を主体的に捉え、活用すること、情報技術を学習や日常生活に活用できるようにすることの重要性を強調している。

- 各学校においては、教科等横断的な視点からの教育課程の編成を通じて、各教科等の学習の過程における指導の中で情報活用能力を育成することが期待される。

- 生成AIの仕組みの理解、学びに生かしていく視点、近い将来生成AIを使いこなすための力を、各教科等の中において意識的に育っていく姿勢は重要である。
- 生成AIが社会生活に組み込まれていくことを念頭に、発達の段階等を踏まえつつ、情報モラルを含む情報活用能力の育成を充実させていくことが必要である。

初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン(Ver. 2.0)【概要】

3. 学校現場において押さえておくべきポイント

学校現場で利活用する場面	具体的な利活用例	利活用の際のポイント	
教職員の校務 	<ul style="list-style-type: none"> 校務の効率化や質の向上等、働き方改革につなげていくことが期待される 新たな技術に慣れ親しみ、利便性や懸念点を知っておくことは、児童生徒の学びをより高度化する観点からも重要 内容の適切性を判断できる範囲内で積極的に利活用することは有用 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の指導にかかる業務への支援（授業準備、部活動、生徒指導 等） ex. 授業で取り扱う教材や確認テスト問題のたたき台を作成する 学校の運営にかかる業務への支援（教務管理、学校からの情報発信、校内研修 等） ex. 各種お便り・通知文・案内文のたたき台を作成する 外部対応への支援 ex. 保護者会・授業参観・保護者面談の日程調整に活用する 	<ul style="list-style-type: none"> AIサービスの最新の利用規約を確認・遵守する 原則、重要性の高い成績情報等を入力しない 個人情報保護法等を遵守すること、著作権侵害につながるような使い方をしないこと バイアス等の生成AIの特徴を理解した上で、出力された内容を採用するかどうかは必ず教職員が判断する 管理職は適切な利活用がなされているかを確認する
児童生徒の学習活動 	<ul style="list-style-type: none"> 発達の段階や情報活用能力の育成状況に留意しつつ、リスクや懸念に対策を講じた上で利活用を検討すべき その際、学習指導要領に定める資質・能力の育成に寄与するか、教育活動の目的を達成する観点から効果的であるかを吟味することが必要 「生成AI自体を学ぶ場面」、「使い方を学ぶ場面」、「各教科等の学びにおいて積極的に用いる場面」を組み合わせたり往還したりしながら、生成AIの仕組みへの理解や学びに生かす力を高める 	<ul style="list-style-type: none"> 情報モラル教育の一環として、生成AIが生成する誤りを含む出力を教材に、その性質や限界に気付く グループの考えをまとめる、アイディアを出す活動の途中段階で、一定の議論やまとめをした上で、足りない視点を見つけ議論を深める目的で活用する 英会話の相手として活用したり、より自然な英語表現への改善や一人一人の興味関心に応じた単語リストや例文リストの作成に活用したりする プログラミングの授業において、児童生徒のアイディアを実現するためのプログラムの制作に活用する 等 	<ul style="list-style-type: none"> 年齢制限等の最新の利用規約を確認・遵守し、教師の適切な指導監督の下で利活用させることが必要 教育情報セキュリティポリシーや教育情報セキュリティ管理者の指示等を遵守することが必要 氏名や写真等の個人情報を入力させないこと、著作権侵害につながるような使い方をさせないこと 出力に偏りがないかなど、教育目的に照らして適切かを教師が隨時判断することが必要 保護者に対し、利用目的や様態等の情報提供が重要
教育委員会等が押さえておくべきポイント	適切な利活用のために考慮すべきポイント		
	<ul style="list-style-type: none"> 教育委員会が主導して制度設計や利活用の指向性を示すことが重要 各学校の実態を十分に踏まえた柔軟な対応を講じることが必要であり、一律に禁止・義務付けるなどの硬直的な運用は望ましくない 先行事例や教材・ノウハウの周知・共有、効果的な活用を促進する研修の実施により、生成AIの適切な利活用を推進する環境を整備することが必要 		
	<ul style="list-style-type: none"> 各学校が適切に生成AIの利活用を行えるよう各学校の実態を十分に踏まえた柔軟な対応を講じることが必要 教育現場の実態に即した教育情報セキュリティポリシーを教育委員会が策定、必要に応じて見直すことが重要 個人情報の取扱いに関して必要かつ適切な措置が取られているか確認すること。著作権の侵害リスクを低減するため、適切な予防措置を講じているモデルやサービスを選択することも考えられる バイアス等のリスクや懸念を踏まえた教職員による最終的な判断が不可欠であることなど、適切な情報提供や研修等のサポートを行うことができるよう、体制の整備や知見の収集に努めることが重要 生成AIサービスを導入する際は、保護者の経済的な負担等に十分に配慮しつつ、適切な利活用を実現するための研修を実施するなど、丁寧な情報提供を行うことが必要 		

初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン(Ver. 2.0)【概要】

参考資料編

利活用する際のチェック項目

教職員の校務

- 教育委員会の方針（情報セキュリティに関するルール・指示等も含む）に基づき利用しているか
- 業務端末又は教育情報セキュリティ管理者の許可を得た端末を利用してい るか
- 生成AIサービスの提供者が定める最新の利用規約を確認・遵守しているか
- ハリシネーションやバイアス等の生成AIの特徴を理解した上で、出力結果の適切性を判断できる範囲内で利用し、出力された内容を採用するかどうかを自身で判断しているか

児童生徒の学習活動

- 教育活動の目的を達成する観点で効果的であることを確認しているか
- 児童生徒の発達の段階や情報活用能力の育成状況に十分留意しているか
- 生成AIの性質やメリット・デメリット、情報の真偽を確かめる、自己の判断や考えが重要であることを十分に認識できるような使い方等に関する学習を実施しているか
- プロンプトに氏名や写真等の個人情報を入力しないよう十分な指導を行っているか
- 著作権の侵害につながるような使い方をしないよう十分に指導しているか

- プロンプトに重要性の高い成績情報等の情報を入力していないか
※重要性の高い情報を扱う前提のセキュリティ対策が講じられている場合は除く（ただし、重要性の高い情報のうち個人情報に該当する情報については、以下「プロンプトに個人情報を入力していないか」についても留意する必要がある。）
- プロンプトに個人情報を入力していないか
※教職員がプロンプトに入力した個人情報を、生成AIの提供者において応答結果の出力以外の目的で取り扱わないことを確認している場合は除く
- 著作権の侵害につながるような使い方をしていないか

- 生成AIサービスの提供者が定める最新の利用規約を確認・遵守しているか(年齢制限や保護者の同意の必要性、生成物のライセンスの所在など)
- 生成AIによる生成物をそのまま自己の成果物として使用することは自分のためにならないこと、使用方法によっては不適切又は不正な行為になることを十分に指導しているか。
- 学習課題に生成AIの回答を引用している場合、出典・引用を記載することを理解させているか
- 保護者の経済的負担に十分に配慮して生成AIツールを選択しているか
- 児童生徒が学校外で生成AIを利活用する可能性も踏まえ、生成AIの不適切な利活用が行われないよう、保護者に対し周知し、理解を得ているか

生成AIパイロット校における先行取組事例



「教職員による校務での利活用例」や「学習場面において利活用が考えられる例」に即した生成AIパイロット校の先行取組事例を掲載している。



学校現場で活用可能な研修教材等



文部科学省等が実施してきた研修(アーカイブ公開含む)や利用可能なコンテンツ等の例を掲載している。

